

死者の書

折口信夫

青空文庫

彼の人の眠りは、徐かに覺めて行つた。まつ黒い夜の中に、更に冷え圧するものゝ澱んでゐるなかに、目のあいて来るのを、覺えたのである。

した した した。耳に伝ふやうに来るのは、水の垂れる音か。たゞ凍りつくやうな暗闇の中で、おのづと睫と睫とが離れて来る。膝が、肱が、徐ろに埋れてゐた感覚をとり戻して来るらしく、彼の人の頭に響いて居るもの――。全身にこはゞつた筋が、僅かな響きを立て、掌・足の裏に到るまで、ひきつれを起しかけてゐ

るのだ。

さうして、なほ深い闇。ぼつちりと目をあいて見廻す瞳に、まづアッ
圧しかゝる黒い巖の天井を意識した。次いで、氷になつた岩牀。
両脇に垂れさがる荒石の壁。したくと、岩イハツタ伝ツクふ雪の音。

時がたつた——。眠りの深さが、はじめて頭に浮んで来る。長い
眠りであつた。けれども亦、マタ浅い夢ばかりを見続けて居た気がす
る。うつらく思つてゐた考へが、現実にツナガ繋つて、ありくと、
目に沁みついてゐるやうである。

あゝ耳面ミミモノトジ刀白。

甦ヨミガハつた語が、彼の人の記憶を、更に弾力あるものに、響き返した。

耳面ミミモノトジ刀白。おれはまだお前を……思つてゐる。おれはきのふ、

こゝに來たのではない。それも、をとゝひや、其^ソさきの日
 こゝに眠りこけたのでは、決してないのだ。おれは、もつと
 く長く寝て居た。でも、おれはまだ、お前を思ひ続けて居
 たぞ。耳^{ミミ}面^モ刀^ノ自^ト。こゝに來る前から……こゝに寝ても、……
 其から覺めた今まで、一続きに、一つ事を考へつめて居るの
 だ。

古^コい——祖先以來さうしたやうに、此^{コノ}世^ヨに在る間さう暮して居た
 ——習^{ナラハ}しからである。彼の人は、のくつと起き直らうとした。だ
 が、筋^キ々が断^キれるほどの痛みを感じた。骨の節々の挫けるやうな、
 疼^{ウツ}きを覺えた。……そうして尚^{ナホ}、ぢつと、——ぢつとして居る。
 射^ヌ干^バ玉^{タマ}の闇。黒玉の大きな石壁に、刻み込まれた白々としたから

だの様に、^{ヤウ}厳かに、^{オゴソ}だが、すんなりと、手を伸べたまゝで居た。耳面刀自の記憶。たゞ^{ソレ}其だけの深い凝結した記憶。其が次第に蔓^{ヒロガ}つて、過ぎた日の様々な姿を、短い聯想の紐^{ヒモ}に貫いて行く。さうして明るい意思が、彼の人の死枯^{シニガ}れたからだに、再立^{フタタビ}ち直つて来た。

耳面刀自。おれが見たのは、^{タダ}唯一目——唯一度だ。だが、おまへのことを聞きわたつた年月は、久しかつた。おれによつて来い。耳面刀自。

記憶の裏から、反省に似たものが浮び出て来た。

おれは、このおれは、^{ドコ}何処に居るのだ。……それから、こゝは何処なのだ。其^{ソレ}よりも第一、此^{コノ}おれは誰^{ダレ}なのだ。其をすつ

かり、おれは忘れた。

だが、待てよ。おれは覚えて居る。あの時だ。鴨が声ネを聞いたのだつけ。さうだ。訳語田ワサダの家を引き出されて、磐余イハレの池に行つた。堤の上には、遠捲きに人が一ぱい。あしこの萱原、そのの矮叢ボサから、首がつき出て居た。皆が、大きな喚オラび声を、挙げて居たつけな。あの声は残らず、おれをいとしがつて居る、半泣きの喚ワメき声だつたのだ。

其でもおれの心は、澄みきつて居た。まるで、池の水だつた。あれは、秋だつたものな。はつきり聞いたのが、水の上に浮いてゐる鴨カモドリ鳥トリの声コエだつた。今思ふと——待てよ。其は何だか一目惚れの女の哭ナき声だつた気がする。——を、あれが

耳面刀自。其瞬間、肉体と一つに、おれの心は、急に締めあげられるやうな刹那セツナを、通つた気がした。俄ニハかに、楽な広々とした世間に、出たやうな感じが来た。さうして、ほんの暫らく、ふつとさう考へたきりで……、空も見ぬ、土も見ぬ、花や、木の色も消え去つた——おれ自分すら、おれが何だか、ちつとも訣ワカらぬ世界のものになつてしまつたのだ。

あゝ、其時ソノきり、おれ自身、このおれを、忘れてしまつたのだ。

足の踝クルフシが、膝ヒツカガミの膕カガミが、腰のつがひが、頸クビのつけ根が、顛コメカミ顛カミが、ほんの窪クボが——と、段々上つて来るひよめきの為に蠢ウゴメいた。自然に、ほんの偶然強コハばつたまゝの膝が、折り屈められた。だが、依

然として——常闇。^{トコヤミ}

を、さうだ。伊勢の国に居られる貴い巫女^{ミコ}——おれの姉御^ゴ。

あのお人が、おれを呼び活^イけに来てゐる。

姉御。こゝだ。でもおまへさまは、尊^{オン}い御神に仕へてゐる人

だ。おれのからだに、触^{サハ}つてはならない。そこに居るのだ。

ぢつとそこに、踏^フみ止^{トマ}つて居るのだ。——あゝおれは、死ん

でゐる。死んだ。殺されたのだ。——忘れて居た。さうだ。

此は、おれの墓だ。

いけない。そこを開^アけては。塚の通ひ路の、扉をこじるのは

およし。……よせ。よさないか。姉の馬鹿。

なあんだ。誰も、来ては居なかつたのだな。あゝよかつた。

おれのからだは、天日テンピに暴サラされて、見るく、腐るところだつた。だが、をかしいぞ。かうつと——あれは昔だ。あのこじあける音がするのも、昔だ。姉御の声で、塚道の扉を叩きながら、言つて居たのも今イシマの事——だつたと思ふのだが。昔だ。

おれのこゝへ来て、間もないことだつた。おれは知つてゐた。十月だつたから、鴨が鳴いて居たのだ。其鴨みたいに、首を捻ぢちぎられて、何も訣ワカらぬものになつたことも。かうつと——姉御が、墓の戸で哭ワメき喚いて、歌をうたひあげられたつけ。「巖イソ岩ウヘの上に生ふる馬アシビ酔木を」と聞えたので、ふと、冬が過ぎて、春も闌タけ初めた頃だと知つた。おれの骸ムクロが、もう

半分融け出した時分だった。そのあと、「たをらめど……見すべき君がありと言はなくなに」。さう言はれたので、はつきりもう、死んだ人間になつた、と感じたのだ。……其時、手で、今してる様にさはつて見たら、驚いたことに、おれのからだは、著キこんだ著物の下で、腊ホジシのように、ペしやんこになつて居た——。

臂カヒナが動き出した。片手は、まつくらな空クウをさした。さうして、今一方は、そのまゝ、岩牀ドコの上を掻き搜つて居る。

うつそみの人なる我や。明日よりは、フタカミ二上山を愛兄弟と
思はむ

ナキウタ誄歌が聞えて来たのだ。姉御があきらめないで、も一つつ

ぎ足して、歌つてくれたのだ。其で知つたのは、おれの墓と言ふものが、二上山の上にある、と言ふことだ。

よい姉御だつた。併し、其歌の後で、又おれは、何もわからぬものになつてしまつた。

其から、どれほどたつたのかなあ。どうもよつほど、長い間だつた気がする。伊勢の巫女様、尊い姉御が来てくれたのは、居睡りの夢を醒サマされた感じだつた。其に比べると、今度は深い睡りの後見アトたいな気がする。あの音がしてる。昔の音が――。

手にとるやうだ。目に見るやうだ。心を鎮めて――。鎮めて。でない、この考へが、復散マタらかつて行つてしまふ。おれの

昔が、ありくと訣^{ワカ}つて来た。だが待てよ。……其にしても
 一体、こゝに居るおれは、だれなのだ。だれの子なのだ。だ
 れの夫^{ツマ}なのだ。其をおれは、忘れてしまつてゐるのだ。

両の臂は、頸の廻り、胸の上、腰から膝をまさぐつて居る。さう
 してまるで、生き物のするやうな、深い溜め息が洩れて出た。

大変だ。おれの著物^{キモノ}は、もうすっかり朽^{クサ}つて居る。おれの禪^{ハカマ}
 は、ほこりになつて飛んで行つた。どうしろ、と言ふのだ。

此^{コノ}おれは、著物もなしに、寝て居るのだ。

筋ばしるやうに、彼の人のからだに、血の馳^カけ廻るに似たものが、
 過ぎた。肱を支へて、上半身が闇の中に起き上つた。

をゝ寒い。おれを、どうしろと仰^{オツシヤ}るのだ。尊いおつかさま。

おれが悪かつたと言ふのなら、あやまります。著物を下さい。著物を——。おれのからだは、地べたに凍りついてしまひます。

彼の人には、声であつた。だが、声でないものとして、消えてしまつた。声でない語が、何時までも続いてゐる。

くれろ。おつかさま。著物がなくなつた。すつぱだかでお出た来た赤ん坊になりたいぞ。赤ん坊だ。おれは。こんなに、寝床の上を這ひずり廻つてゐるのが、だれにも訣らぬのか。こんなに、手足をばた／＼やつてゐるおれの、見える奴が居ぬのか。

その唸き声のとほり、彼の人の骸は、まるでだゞをこねる赤子の

ように、足もあがぐに、身あがきをば、くり返して居る。明りのさゝなかつた墓穴の中が、時を経て、薄い氷の膜ほど透^スけてきて、物のたゞずまひを、幾分朧^{オボ}ろに、見わけることが出来るやうになつて来た。どこからか、月光とも思へる薄あかりが、さし入つて来たのである。

どうしよう。どうしよう。おれは。——大刀までこんなに、錆^サびついてしまった……。

月は、依然として照つて居た。山が高いので、光りにあたるものが少かつた。山を照し、谷を輝かして、剩る光りは、又空に跳ね返つて、残る隈々までも、鮮やかにうつし出した。

足もとには、沢山の峰があつた。黒ずんで見える峰々が、入りくみ、絡みあつて、深々と畝つてゐる。其が見えたり隠れたりするのは、この夜更けになつて、俄かに出て来た霞の所為だ。其が又、此冴えざえとした月夜を、ほつとりと、暖かく感じさせて居る。

広い端山の群つた先は、白い砂の光る河原だ。目の下遠く続いた、輝く大佩帯は、石川である。その南北に涉つてゐる長い光りの筋が、北の端で急に広がつて見えるのは、凡河内の邑のあたりであらう。其へ、山間を出たばかりの堅塩川——大和川——が落ち

あつて居るのだ。そこから、乾イヌキの方へ、光りを照り返す平面が、
 幾つも列ツラナつて見えるのは、日下江クサカエ・永瀬江ナガセエ・難波江ナニハエなどの水面で
 あらう。

寂シツかな夜である。やがて鶏鳴近い山の姿は、一様に露に濡れたや
 うに、しつとりとして静まつて居る。谷にちら／＼する雪のやう
 な輝きは、目の下の山田谷に多い、小桜の遅れ咲きである。

一本の路が、真直に通つてゐる。二上山の男嶽ヲノカミ・女嶽メノカミの間か
 ら、急に降サガつて来るのである。難波ナニハから飛鳥アスカの都への古い間道な
 ので、日によつては、昼は相応な人通りがある。道は白々と広く、
 夜目には、芝草ハの蔓ひつて居るのすら見える。当麻路タギマヂである。一降
 りして又、大降クダりにかゝらうとする処が、中だるみに、や／＼坦ヒラタく

なつてゐた。梢の尖つた栢トガの木の森。半世紀を経た位の木ぶりが、
 一様に揃つて見える。月の光りも薄い木陰全体が、勾配を背負つ
 て造られた円塚であつた。月は、瞬きもせず照し、山々は、深
 く眸マブタを閉ぢてゐる。

こう　　こう　　こう。

先刻サツキから、聞えて居たのかも知れぬ。あまり寂けさに馴れた耳は、
 新たな声を聞きつけよう、としなかつたのであらう。だから、今珍
 しく響いて来た感じもないのだ。

こう　　こう　　こう——こう　　こう　　こう。

確かに人声である。鳥の夜声とは、はつきりかはつた韻ヒビキを曳いて
 来る。声は、暫らく止んだ。静寂は以前に増し、冴え返つて張り

きつてゐる。この山の峰つゞきに見えるのは、南に幾重ともなく
カサナ重つた、カツラギ葛城の峰々である。伏フシゴエ越・クシラ櫛羅・コゴセ小巨勢と段々高ま
 つて、果ては空の中につき入りさうに、二上山と、この塚にのし
 かゝるほど、真黒に立ちつゞいてゐる。

当麻路をこちらへ降つて来るらしい影が、見え出した。二つ三つ
 五つ……八つ九つ。九人の姿である。急な降りを一気に、この河
 内路へ馳けおりて来る。

九人と言ふよりは、九柱の神であつた。白い著物・白カツラい鬘、手は、
 足は、すべて旅の装束イデタチである。頭より上に出た杖をついて――。
 この坦タヒラに来て、森の前に立つた。

こう　　こう　　こう。

誰の口からともなく、一時に出た叫びである。山々のこだまは、驚いて一様に、忙しく声を合せた。だが、山は、タチマチ忽一時の騷擾から、元の緘黙シシマに戻つてしまつた。

こう。こう。お出でなされ。藤原南家郎女ナンケイラツメの御魂ミタマ。

こんな奥山に、迷うて居るものではない。早く、もとの身に
戻れ。こう。こう。

お身さまの魂タマを、今、山たづね尋ねて、尋ねあてたおれたち
ぞよ。こう。こう。こう。

九つの杖びとは、心から神になつて居る。彼らは、杖を地に置き、
鬘カツラを解いた。鬘カツラは此時、唯真白な布に過ぎなかつた。其を、長さ
の限り振り捌サバいて、一様に塚に向けて振つた。

こう　　こう　　こう。

かう言ふ動作をくり返して居る間に、自然な感情の鬱屈と、休息を欲するからだの疲れとが、九体の神の心を、人間に返した。彼らを見る間に、白い布を頭に捲きこんで鬢とし、杖を手にとつた旅人として、立つてゐた。

をい。無言シジマの勤めツトも此までぢや。
を。

八つの声が答へて、彼等は訓練せられた所作のやうに、忽タチマチ一度に、草の上に寛クツロぎ、再杖フタタビを横ヨコタへた。

これで大和ヤマトも、河内カハチとの境ぢやで、もう魂キヤウごひの行キヤウもすんだ。

今時分は、郎女イホリさまのからだは、廬イホリの中で魂をとり返して、

びちくして居られようぞ。

こゝは、何処ドコだいの。

知らぬかいよ。大和にとつては大和の国、河内にとつては河

内の国の大関オホゼキ。二上の当麻路タギマヂの関セキ——。

別の長老トネめいた者が、説明ツを続いだ。

四五十年あとまでは、唯関タタと言ふばかりで、何の標シルシもなかつ

た。其ソレがあので、近江の滋賀の宮に馴染み深かつた、其よ。大

和では、磯城シキの訳語田ヲサダの御館ミタチに居られたお方。池上の堤で命

召されたあのお方の骸ムクロを、罪人モガリに殯モガリするは、災の元と、天若アメワ

日子カヒコの昔語りに任せて、其まゝ此処ココにお搬ハコびなされて、お埋イ

けになつたのが、此塚よ。

以前の声が、まう一層皺シワがれた響きで、話をひきとつた。

其時の仰せには、罪人よ。吾子ワコよ。吾子の為シラフ了せなんだ荒アラび
心で、吾子よりももつと、わるい猛び心を持つた者の、大和
に來向うのを、待ち押え、塞サへ防いで居ろ、と仰せられた。
ほんに、あの頃は、まだおれたちも、壯ワカザカ盛りぢやつたに。
今ではもう、五十年昔になるげな。

今一人が、相談でもしかける様な、口ぶりを挿んだ。

さいや。あの時も、墓作りに雇はれた。その後も、当麻路の
修覆に召し出された。此お墓の事は、よく知つて居る。ほん
の苗木ぢやつた栢カハが、此コレほどの森になつたものな。畏コハかつた
ぞよ。此墓のみ魂タマが、河内安宿部アスカベから石担モちに來て居た男に、

憑いた時はなう。

九人は、完全に現^{ウツ}し世^ヨの庶民の心に、なり還つて居た。山の上は、昔語りするには、あまり寂しいことを忘れて居たのである。時の更^フけ過ぎた事が、彼等の心には、現実にひしくと、感じられ出したのだらう。

もう此でよい。戻らうや。

よかろ よかろ。

皆は、鬘をほどき、杖を棄てた白衣の修道者、と言ふだけの姿^{ナリ}になつた。

だがの。皆も知つてようが、このお塚は、由緒^{ユキシヨフカ}深い、気のおける処ゆゑ、まう一度、魂^{タマ}ごひをしておくまいか。

長老トネの語と共に、修道者たちは、再魂フタタビマヨバ呼ヨバひの行ギヤウを初めたのである。

こう　こう　こう。

をゝ……。

異様な声を出すものだ、と初めは誰も、自分らの中の一人を疑ひ、其でも変に、おぢけづいた心を持ちかけてゐた。も一度、

こう　こう　こう。

其時、塚穴の深い奥から、氷コホりきつた、而シカも今息を吹き返したばかりの聲が、明らかに和したのである。

をゝう……。

九人の心は、ばら／＼の九人の心々であつた。からだも亦ちり／＼に、山田谷へ、竹内谷へ、大阪越えへ、又当麻路へ、峰にちぎれた白い雲のやうに、消えてしまつた。

唯畳まつた山と、谷とに響いて、一つの声ばかりがする。

をう……。

三

万^{マン}法^{ホフ}蔵^{ザウ}院^{ウケン}の北の山陰に、昔から小^チな^{ヒサ}庵^{アン}室^{ジツ}があつた。昔からと言ふのは、村人がすべて、さう信じて居たのである。荒廃すれ

ば繕ひくくして、人は住まぬ廬イホリに、孔雀クジヤクミヤウワウザウ明王像ミョウオウゾウが据ゑてあつた。当麻タギマの村人の中には、稀に、此が山田寺である、と言ふものもあつた。さう言ふ人の伝へでは、万法蔵院は、山田寺の荒れて後、飛鳥アスカの宮の仰せを受けてとも言ひ、又御自身の御発起ゴホツキからだとも言ふが、一人の尊いみ子が、昔の地を占めにお出でなされて、大伽藍ダイガランを建てさせられた。其際、山田寺の旧構を残すため、寺の四至の中、北の隅へ、当時立ち朽グサりになつて居た堂を移し、規模を小さくして造られたもの、と伝へ言ふのであつた。

さう言へば、山田寺は、役君エノキミ小角コツツが、山林仏教を創ハジめる最初の足代アシシロになつた処だと言ふ伝へが、吉野や、葛城の山伏ヤマブシ行人ギヤウニンの間に行はれてゐた。何しろ、万法蔵院の大伽藍が焼けて百年、

荒野の道場となつて居た、目と鼻との間に、こんな古い建て物が、残つて居たと言ふのも、不思議なことである。

夜は、もう更けて居た。谷川の激タギちの音が、段々高まつて来る。

二上山の二つの峰の間から、流れくだる水なのだ。

廬の中は、暗かつた。炬を焚くことの少い此ヘン辺では、地下ヂゲ百姓は、

夜は真暗な中で、寝たり、坐つたりしてゐるのだ。でもこゝには、本尊が祀つてあつた。

夜を守つて、仏の前で起き明す為には、御ミアカシ灯を照した。

孔雀明王の姿が、あるかないかに、ちろめく光りである。

姫は寝ることを忘れたやうに、坐つて居た。

万法蔵院の上座の僧ソウガウ綱たちの考へでは、まづ奈良へ使ひを出さ

ねばならぬ。横ヨコ佩ハキケ家の人々の心を、思うたのである。次には、

女人ケツカイ結界を犯して、境内深く這ハヒ入つた罪は、郎女自身アガナに贖はさ

ねばならなかつた。落慶のあつたばかりの浄域だけに、一時は、

塔タツチユウ

頭々々の人たちの、青くなつたのも、道理である。此は、

財物を施入する、と謂つたぐらゐではすまされぬ。長期の物忌みを、寺近くに居て果させねばならぬと思つた。其で、今日昼の程、奈良へ向つて、早ハヤツカ使ひを出して、郎女イラツメの姿が、寺中に現れたゆくたてを、仔細に告げてやつたのである。

其と共に姫の身は、此庵室に暫らく留め置かれることになつた。たとひ、都からの迎へが来ても、結界を越えた贖ひを果す日数だけは、こゝに居させよう、と言ふのである。

牀^{ユカ}は低いけれども、かいてあるにはあつた。其替り、天井は無^{ムシヤ}
 上^ウに高く、而も萱^{シカカヤ}のそゝけた屋根は、破風の脇^{ハフ}から、むき出
 しに、空の星が見えた。風が唸^{ウナ}つて過ぎたと思ふと、其高い隙^{スキ}か
 ら、どつと吹き込んで来た。ばら／＼^{スス}落ちかゝるのは、煤^{スス}がこ
 ぼれるのだらう。明王の前の灯が、一^{イツトキ}時かつと明るくなつた。
 その光りで照し出されたのは、あさましく荒^{スサ}んだ座敷だけでなか
 つた。荒板の牀の上に、薦^{コモムシロ}筵^{シロ}二枚重ねた姫の座席。其に向つ
 て、ずつと離れた壁^{カベ}ぎはに、板敷^{イタダキ}に直^{ヂカ}に坐つて居る老婆の姿があ
 つた。

壁と言ふよりは、壁^{カベシロ}代であつた。天井から吊^ツりさげた豎^{タツゴモ}薦^{ゴモ}が、
 幾枚も幾枚も、ちぐはぐに重つて居て、どうやら、風は防ぐやう

になつて居る。その壁代に張りついたやうに坐つて居る女、先か
らシハブキ嗽一つせぬ静けさである。

貴族の家の郎女は、一日もの言はずとも、寂しいとも思はぬ習慣
がついて居た。其で、この山陰の一つ家に居ても、溜め息一つ洩
すのではなかつた。昼ヒの内ココ此処へ送りこまれた時、一人の姥ウバのつ
いて来たことは、知つて居た。だが、あまり長く音も立たなかつ
たので、人の居ることは忘れて居た。今ふつと明るくなつた御
灯シの色で、その姥の姿から、顔まで一目で見た。どこやら、覚
えのある人の気がする。さすがに、姫にも人懐しかつた。ようべ
家を出てから、女ニヨシヤウ性には、一人も逢つて居ない。今そこに居
る姥ウバが、何だか、昔の知り人のやうに感じられたのも、無理はな

いのである。見覚えのあるやうに感じたのは、だが、其親しみ故
 だけではなかつた。

イラツメ
 郎女さま。

シヅマ
 緘黙を破つて、却てもカヘツの寂しい、乾カラゴエ声が響いた。

郎女は、御存じおざるまい。でも、聴いて見る気はおありか
 え。お生れなさらぬ前の世からのことを。それを知つた姥で
 おざるがや。

一旦、口がほぐれると、老女は止めどなく、喋シヤベり出した。姫は、
 この姥の顔に見知りのある氣のした訣ワケを、悟りはじめて居た。藤
 原南家ナンケにも、常々、此年よりとおなじやうな媪オムナが、出入りして居
 た。郎女たちの居る女部屋オンナベヤまでも、何時イツもづか／＼ハ這入ヒつて

来て、^{ハバカ}憚りなく古物語りを語つた、あの^{ナカトミノシヒノオムナ}中臣志斐媼——。

あれと、おなじ表情をして居る。其も、^{モツトモ}尤であつた。志斐老女が、

藤氏^{トウシ}の語部^{カタリベ}の一人であるやうに、此も亦、この当麻^{タギマ}の村の旧族、

当麻真人^{マヒト}の「氏^{ウヂ}の語部^{カタリベ}」、亡び残りの一人であつたのである。

藤原のお家が、今は、四筋に分れて居ります。ぢやが、大^タ

織^{イシヨククワン}冠^{イシヨククワン}さまの代どころでは、ありは致しませぬ。淡海^{タンカイ}

公^{コウ}の時も、まだ一流れのお家でおざりました。併^{シカ}し其頃^{ソノコロ}

やはり、藤原は、中臣と二つの筋に岐^{ワカ}れました。中臣の氏人

で、藤原の里に栄えられたのが、藤原と、家名の申され初め

でおざりました。

藤原のお流れ。今ゆく先も、公家^{クゲセフロク}撰籙の家柄。中臣の筋や、

おん神仕へ。差別々々明らかに、御代々々の宮守り。ぢやが、今は今、昔は昔でおざりませ。藤原の遠つ祖、中臣の氏の神、天押雲根と申されるお方の事は、お聞き及びかえ。

今、奈良の宮におざります日の御子さま。其前は、藤原の宮の日のみ子さま。又其前は、飛鳥の宮の日のみ子さま。大和の国中に、宮遷し、宮奠め遊した代々の日のみ子さま。長く久しい御代々に仕へた、中臣の家の神業。郎女さま。お聞き及びかえ。

遠い代の昔語り。耳明らめてお聴きなされ。中臣・藤原の遠つ祖あめの押雲根命。遠い昔の日のみ子さまのお喰しの、飯と、み酒を作る御料の水を、大和国中残る隈なく捜し覓め

ました。その頃、国原の水は、水^{ソブ}渋臭く、土^{ツチ}濁りして、日の
 み子さまのお喰^メしの料^{シロ}に叶^{カナ}ひません。天^{テン}の神高天^{タカマ}の大御祖^{オホミオヤ}
 教へ給へと祈らうにも、国中^{ナカ}は国低し。山々もまんだ天^{テン}遠し。
 大和の国とり囲む青垣山^{アラガキヤマ}では、この二上山。空行く雲の通^{カヨ}
 ひ路^チと、昇り立つて祈りました。その時、高天^{タカマ}の大御祖^{オホミオヤ}の
 お示^シしで、中臣の祖押雲根命^{オヤオシクモネ}、天の水の湧^ワき口^{グチ}を、此二上山^{コノ}
 に八^ヤと^ヤころまで見とゞけて、其^{ソノ}後久しく、日のみ子さまのお
 めしの湯水は、代々の中臣自身、此山へ汲みに参ります。お
 聞き及びかえ。

タギマノマヒト
 当麻真人の、氏の物語りである。さうして其が、中臣の神わざ
 カカハ
 と繋りのある点を、座談のやうに語り進んだ姥は、ふと口をつぐ

んだ。

外には、瀬音が荒れて聞えてゐる。中臣・藤原の遠祖が、アメノフ天二
タカミ上に求めたアメノヤキ天八井の水を集めて、峰を流れ降り、岩にあたつ
ミナギて漲り激つ川なのであらう。瀬音のする方に向いて、姫は、タナソコ掌を
 合せた。

併しやがて、ふり向いて、ホノグラ仄暗くさし寄つて来てゐる姥の姿を
 見た時、言はうやうないオソロ畏しさと、せつかれるやうな忙しさを、
 一つに感じたのである。其に、シヒノウバ志斐姥の、本式に物語りをする
 時の表情が、此老女の顔にも現れてゐた。今、タギマ当麻のカタリベ語部のウバ姥
 は、カミガカ神憑りに入るらしく、わなく／＼震ひはじめて居るのである。

四

ひさかたの

我が登り

とぶとりの

ふる里の

家どころ

豊にし

弥彼方に

藤原の

天二上アメフタカミに、

見れば、

明日香アスカ神南備山カムナビゴモ隠り、多サハに見え、屋庭ヤニハは見ゆ。見ゆる家群イヘムラ朝臣アソが宿。

遠々に

我^アが見るものを、

たか／＼に

我^アが待つものを、

処女子^{ヲトメゴ}は

出^イで通ぬものか。

よき耳^{ミミ}を

聞^イかさぬものか。

青馬の

耳面^{ミミモノ}刀^ノ自^ト。

刀自^{ヲトメ}もがも。

女弟^{オト}もがも。

その子の

はらかなりの子の

処女子^{ヲトメゴ}の

一人

一人だに、

わが配偶^{ツマ}に^コ来よ。

ひさかたの
アメフタカミ
 天二上

二上の陽面カゲトモに、

生シひをシり 繁シみ咲く

馬ア酔シ木ビの にはへる子を

我アが 捉トり兼ねて、

馬ア酔シ木ビの あしずりしつゝ

吾アはもよシヌ偲シぶ。藤原処女

歌ヲいラへた姥は、大息をついて、ぐつたりした。其から暫らく、

山のそよぎ、川瀬の響きばかりが、耳についた。

姥は居ゾずまシひを直して、オゴソ厳かなコワネ声音で、カタ誦り出した。

とぶとりの 飛鳥の都に、日のみ子様のおそば近く侍る尊い
 おん方。さゝなみの大津の宮に人となり、モロコシ唐土の学芸ザエに詣イタ
 り深く、カラウタ詩も、此国ではじめて作られたは、大友皇子か、其
 とも此お方か、と申し伝へられる御方。オンカタ

アフミ近江の都は離れ、飛鳥の都の再栄フタタビえたその頃、あやまちもあ
 やまち。日のみ子に弓引くたくみ、恐しや、企てをなされる
 と言ふ噂ウハサが、立ちました。

タカマノハラヒロヌヒメノミコト高天原広野姫尊、おん怒りをお発しになりました、と
 うく池上の堤に引き出して、お討たせになりました。

其お方がお死キハの際キハに、深くく思ひこまれた一人のお人が
 おざります。耳面ミミモノトシ刀自と申す、大織冠のお娘御でおざりま

す。前から深くお思ひになつて居た、と云ふでもありません。唯、此郎女も、大津の宮離れの時に、都へ呼び返されて、寂しい暮しを続けて居られました。等しく大津の宮に愛着をお持ち遊した右の御方が、愈々イヨイヨ、磐余イハレの池の草の上で、お命召されると言ふことを聞いて、一目見てなごり惜しみがしたくて、こらへられなくなりました。藤原から池上まで、おひろひでお出でになりました。小高い柴の一むらある中から、御様子を窺うて帰らうとなされました。其時ちらりと、かのお人の、最期に近いお目に止りました。其ひと目が、此世に残る執心となつたのでおざります。

もゝつたふ 磐余イハレの池に鳴く鴨を 今日のみ見てや、雲隠

りなむ

この思ひがけない心残りを、お詠みになつた歌よ、と私ども
 当麻の語部カタリベの物語りには、伝へて居ります。

その耳面刀自と申すは、淡海公の妹君、郎女の祖父君南家オホヂ ナンケダ
 太政大臣イジヤウには、叔母君にお当りになつてゝおざりまする。

人間の執心シフシンと言ふものは、怖いものとはお思ひなされぬか
 え。

其亡き骸ナ ガラは、大和の国を守らせよ、と言ふ御諛ゴチヤウで、此山の
 上、河内から来る当麻路の脇にお埋イけになりました。其が何ナ
 と、此世の悪心も何もかも、忘れ果て、清スガ々スガしい心になり
 ながら、唯そればかりの一念が、残つて居る、と申します。

藤原四流の中で、一番美しい郎女が、今におき、耳面刀自と、

其^{カクリヨ}幽界の目には、見えるらしいのでおざります。女盛り

をまだ^{ムコ}婿どりなさらぬげの郎女さまが、其力におびかれて、

この当麻^{タギマ}までお出でになつたのでなうて、何でおざりませう。

当麻路に墓を造りました^{ソノカミ}当時、石を^{ハコ}搬ぶ若い衆にのり移つ

た^{タマ}霊が、あの長歌を^{ウタ}謳うた、と申すのが伝へ。

当麻^{タギマノカタリノオムナ}語部^{オビ}媪は、南家の郎女の脅える様を想像しながら、物

語つて居たのかも知れぬ。唯さへ、この深夜、場所も場所である。

如何^{イカ}に止めどなくなるのが、「ひとり語り^{ガタ}」の癖とは言へ、語部

の古^{フルババ}婆の心は、自身も思はぬ意地くね悪さを蔵してゐるもので

ある。此^{コレ}が、神さびた職を寂しく守つて居る者の優越感を、^{ミタ}充す

ことにも、なるのであつた。

大貴族の郎女は、人の語を疑ふことは教へられて居なかつた。それに、信じなければならぬもの、とせられて居た語部の物語りである。詞の端々までも、眞実を感じて、聴いて居る。

言ふとほり、昔びとの宿執シユクシフが、かうして自分を導いて来たことは、まことに違ひないであらう。其にしても、つひしか見ぬお姿——尊い御仏と申すやうな相好サウガウが、其お方とは思はれぬ。

春秋の彼岸中日、入り方の光り輝く雲の上に、まぎ／＼と見たお姿。此日本の国の人とは思はれぬ。だが、自分のまだ知らぬこの国の男子ヲノコゴたちには、あゝ言ふ方もあるのか知らぬ。金色コンジキの鬢、金色の髪カミの豊かに垂れかゝる片肌は、白々と袒ヌいで美しい肩。

ふくよかなお顔は、鼻隆く、眉秀で夢見るやうにまみを伏せて、
 右手は乳の辺に挙げ、脇の下に垂れた左手は、ふくよかな掌を見
 せて……あゝ雲の上に朱の唇、匂ひやかにほゝ笑まれると見た：
 ……その倂オモカゲ。

日のみ子さまの御側仕へのお人の中には、あの様な人もおいでに
 なるものだらうか。我が家の父や、兄人たちも、世間の男たちと
 は、とりわけてお美しい、と女たちは噂するが、其すら似もつか
 ぬ……。

尊い女ニヨシヤウ性は、下賤な人と、口をきかぬのが当時の世の掟オキテであ
 る。何よりも、其語は、下さまには通じぬもの、と考へられてあ
 た。それでも、此古物語りをする姥には、貴族の語もわかるであ

らう。郎女は、恥ぢながら問ひかけた。

その人。ものを聞かう。此身の語が、聞きとれたら、答へしておくれ。

その飛鳥の宮の日のみ子さまに仕へた、と言ふお方は、昔の罪びとらしいに、其が又何とした訣ワケで、姫の前に立ち現れては、神々カウガウしく見えるであらうぞ。

此だけの語が言ひ淀み、淀みして言はれてゐる間に、姥は、郎女の内に動く心もちの、凡オヨソは、氣どつたであらう。暗いみ灯アカシの光りの代りに、其頃は、もう東白みの明りが、部屋の内の物の形を、朧オボろげアラハに顯しはじめて居た。

我が説明コトワケを、お聞きわけられませ。神代の昔びと、天若日アメワカ

子。^{ヒコ}天若日子こそは、天の神々に弓引いた罪ある神。其すら、^{ソノゴ}其後、人の世になつても、氏貴い家々の娘御の閨の戸までも、^{ゴネヤ}忍びよると申します。世に言ふ「天若みこ」と言ふのが、^{アメワカ}其でおざります。

天若みこ。物語りにも、うき世語りにも申します。お聞き及びかえ。^{ヨガタ}

姥は暫らく口を閉ぢた。さうして言ひ出した声は、顔にも、年も似ず、一段、はなやいで聞えた。

「もゝつたふ」の歌、残された飛鳥の宮の執心びと、世々の藤原の一の媛に崇る天若みこも、顔清く、声心惹く天若みこのやはり、一人でおざります。

お心つけられませ。物語りも早、これまで。

其まゝ石のやうに、老女はぢつとして居る。冷えた夜も、朝影アサカゲを感じると、幾らか温ヌクみがさして来る。

万法蔵院は、村からは遠く、山によつて立つて居た。暁早い鶏コの聲も、聞えぬ。もう梢コズエを離れるらしいネグ埒ラドリ鳥が、近い端山ハヤマの木ムラ群ハブで、羽振きの音を立て初めてゐる。

五

おれは活イきた。

闇い空間は、明りのやうなものを漂してゐた。併し其は、蒼黒い靄の如く、たなびくものであつた。

巖ばかりであつた。壁も、牀も、梁も、巖であつた。自身のからだすらが、既に、巖になつて居たのだ。

屋根が壁であつた。壁が牀であつた。巖ばかり——。触つても触つても、巖ばかりである。手を伸すと、更に堅い巖が、掌に触れた。脚をひろげると、もつと広い磐石の面が、感じられた。纔かにさす薄光りも、黒い巖石が皆吸ひとつたやうに、岩窟の中に見えるものはなかつた。唯けはひ——彼の人の探り歩くらしい空気の微動があつた。

思ひ出したぞ。おれが誰だつたか、——訣つたぞ。

おれだ。此^{コソ}おれだ。大津の宮に仕へ、飛鳥の宮に呼び戻され
たおれ。滋賀^{シガツヒコ}津彦。其^{ソレ}が、おれだつたのだ。

歡びの激情を迎へるやうに、岩窟^{イハムロ}の中のすべての突角^{タケ}が嘯^{タケ}びの
反響をあげた。彼の人は、立つて居た。一本の木だつた。だが、
其姿が見えるほどの、はつきりした光線はなかつた。明りに照し
出されるほど、纏^{マトマ}つた現^{ウツ}し身^ミをも、持たぬ彼^カの人であつた。
唯、岩屋の中に轟^{シユクリツ}立した、立ち枯れの木に過ぎなかつた。

おれの名は、誰も伝へるものがない。おれすら忘れて居た。
長く久しく、おれ自身にすら忘れられて居たのだ。可愛^{イト}しい
おれの名は、さうだ。語り伝へる子があつた筈だ。語り伝へ
させる筈の語部^{カタリベ}も、出来て居たぐらうに。——なぜか、お

れの心は寂しい。空虚な感じが、しく／＼と胸を刺すやうだ。
——子代も、名代もコシロ ナシロない、おれにせられてしまったのだ。さ
うだ。其に違ひない。この物足らぬ、大きな穴のあいた気持
ちは、其で、するのだ。おれは、此世に居なかつたと同前の
人間になつて、現し身ウツの人間どもには、忘れワフ了されて居るの
だ。憐みのないおつかさま。おまへさまは、おれの妻の、お
れに殉死トモジにするのを、見殺しになされた。おれの妻の生んだ
粟津子アハッコは、罪びとの子として、何処ドコかへ連れて行かれた。野
山のけだもの、餌食エツキに、くれたのだらう。可愛さうな妻よ。
哀アハレなむすこよ。

だが、おれには、そんな事などは、何でもない。おれの名が

伝らない。劫ゴフシヨ初から末代まで、此世に出ては消える、天のアメ

下の青人草シタ アヲヒトグサと一列に、おれは、此世に、影も形も残さない

草の葉になるのは、いやだ。どうあつても、不承知だ。

恵みのないおつかさま。お前さまにお継りスガするにも、其おま

へさますら、もうおいでゝない此世かも知れぬ。

くそ——外ソトの世界が知りたい。世の中の様子が見たい。

だが、おれの耳は聞える。其なのに、目が見えぬ。この耳す

ら、世間の語を聞き別けなくなつて居る。闇の中にばかり瞑ツゲ

つて居たおれの目よ。も一度くわつと睜ミヒラいて、現し世のあり

のまゝをうつしてくれ、……土龍モグラの目など、おれに貸しをれ。

声フタタビシツは再、寂かになつて行つた。独り言する其声は、彼の人の耳に

ばかり聞えて居るのであらう。

丑刻ウシに、静謐セイヒツの頂上に達した現ウツし世ヨは、其が過ぎると共に、俄

かに物音が起る。月の、空を行く音すら聞えさうだつた四方の山

々の上に、まづ木の葉が音もなくうごき出した。次いではるかな

谿タニのながれの色が、白々と見え出す。更に遠く、大和国クニナカ中の、

何処ドコからか起る一番イチバン鶏ドリのつくるとき。

暁が来たのである。里々の男は、今、女の家ネヤドの閨戸ネヤドから、ひそ／

＼と歸つて行くだらう。月は早く傾いたけれど、光りは深夜の色

を保つてゐる。午前二時に朝の来る生活に、村びとも、宮びとも、

忙しいとは思はずに、起きあがる。短い暁の目覚めの後、又、物

に倚ヨりかゝつて、新しい眠りを継ぐのである。

山風は頻りに、吹きおろす。枝・木の葉の相軋めく音が、やむ間なく聞える。だが其も暫らくで、山は元のひつそとしたけしきに還る。唯、すべてが薄暗く、すべてが隈を持ったやうに、朧ろになつて来た。

岩窟は、沈々と黝くなつて冷えて行く。

した。した。水は、岩肌を絞つて垂れてゐる。

耳面刀自。おれには、子が無い。子がなくなつた。おれは、

その榮えてゐる世の中には、跡を貽して来なかつた。子を生んでくれ。おれの子を。おれの名を語り伝へる子どもを――。

岩牀の上に、再白々と横つて見えるのは、身じろきもせぬからだである。唯その真裸な骨の上に、鋭い感覚ばかりが生きてゐる

のであつた。

まだ反省のとり戻されぬむくろには、心になるものがあつて、心はなかつた。

耳面刀自の名は、唯の記憶よりも、更に深い印象であつたに違ひはない。自分すら忘れきつた、彼の人の出来あがらぬ心に、骨に沁み、干からびた髓の心までも、唯彫りつけられたやうになつて、残つてゐるのである。

万法蔵院の晨^{ジンテウ}朝の鐘だ。夜の曙^{アケイロ}色に、一度騒立^{サワダ}つた物々の胸をおちつかせる様に、鳴りわたる鐘の音^ネだ。一ぱし白^{イツ}みかゝつて来た東は、更にほの暗い明^アけ昏^グれの寂けさに返つた。

南家の郎女は、一茎の草のそよぎでも聴き取れるアカツキナ 暁 風ぎを、

自身ミダ擾すことをすまいと言ふ風に、見じろきすらもせずドに居る。

夜ヨルの間マよりも暗くなつた廬イホリの中では、明王像の立ち処ドさへ見定め

られぬばかりになつて居る。

何処ドコからか吹きこんだ朝山風オロシに、御灯ミアカシが消えたのである。当麻タギマ

語部カタリの姥も、薄闇ウツクマに蹲マつて居るのであらう。姫フタタビは再、この老女の

事を忘れてゐた。

たゞ一刻ばかり前、這入ハヒりの戸を揺つた物音があつた。一度 二

度 三度。更に数度。音は次第に激しくなつて行つた。柩トボツがまる

で、おしちぎられでもするかと思ふほど、音に力のこもつて来た

時、ちようど、鶏が鳴いた。其きりぴつたり、戸にあたる者もな

くなつた。

新しい物語が、一切、語部の口にのぼらぬ世が来てゐた。けれども、頑カタクナな当麻タギマウヂ氏の語部の古姥フルウバの為に、我々は今一度、去年以来の物語りをしておいても、よいであらう。まことに其は、昨キノの日からはじまるのである。

六

門をはひると、俄ニハかに松風が、吹きあてるやうに響いた。

一町も先に、固まつて見える堂伽藍——そこまでずつと、砂地である。

白い地面に、広い葉の青いまゝでちらばつて居るのは、朴ホホの木だ。

まともに、寺を圧してつき立つてゐるのは、二上山フタカミヤマである。其ソノ

真下に涅槃ネハン仏のやうな姿に横ヨコつてゐるのが麻呂子山マロコヤマだ。其頂が

やつと、講堂の屋の棟に、乗りかゝつてゐるやうにしか見えない。

こんな事を、女ニヨニン人の身で知つて居る訣ワケはなかつた。だが、俊敏

な此旅コノびとの胸ソレに、其に似たほのかな綜合の、出来あがつて居た

のは疑はれぬ。暫らくの間、その薄緑の山色を仰いで居た。其か

ら、朱塗りの、激しく光る建て物へ、目を移して行つた。

此寺の落慶供養のあつたのは、つい四五日前アトであつた。まだあの

日の喜ばしい騒ぎの響トヨみが、どこかにする様に、麓の村びと等には、感じられて居る程である。

山ヤマオロシ 嵐サラに吹き暴ヤマスツされて、荒草深い山裾の斜面に、万法蔵マンホフザウキ

院ンの細々とした御灯ミアカシの、煽アフられて居たのに目馴れた人たちは、

この幸福な転テンペン変ペンに、目を睜ミハつて居るだらう。此郷に田ナリドコロ 莊コを

残して、奈良に数代住みついた豪族の主人も、その日は、帰つて

来て居たつけ。此は、天竺テンヂクの狐シの為シわぎではないか、其とも、

この葛城郡に、昔から残つてゐる幻術師マボロシのする迷マボロシはしではないか。

あまり 莊シヤウゴン 巖ゴンを極めた建て物に、故知らぬ反感ソソまでソソ唆ソソられて、

廊を踏み鳴し、柱タタを叩タタいて見たりしたのも、その供トモ人ヒトのうち

にはあつた。

数年前の春の初め、野焼きの火が燃えのぼつて来て、唯一宇あつた萱堂カヤダウが、忽痕タチマチもなくなつた。そんな小な事件が起つて、注意を促してすら、そこに、曾カツウルハて美しい福田と、寺の創ハジめられた代ヨを、思ひ出す者もなかつた程、それはく、微かな遠い昔であつた。以前、疑タギマひを持ち初める里の子どもが、其堂の名に、不審を起した。当麻タギマの村アスカベゴホリにありながら、山田寺ヤマダと言つたからである。山の背ウシロの河内の国安宿部郡の山田谷から移つて二百年、寂しい道場に過ぎなかつた。其でも一時は、俱舎クシヤの寺として、栄えたこともあつたのだつた。

飛鳥の御世の、貴い御方が、此寺の本尊を、お夢に見られて、おん子を遣ツカハされ、堂舎をひろげ、住ヂユウリヨ侶リョの数をお殖フヤしになつた。

おひく境内になる土地の地形ヂギヤウの進んでゐる最中、その若い貴人が、急に亡くなられた。さうなる筈の、風水フウスキの相サウが、「まろこ」の身を招き寄せたのだらう。よし／＼墓はそのまゝ、其村に築くがよい、との仰せがあつた。其み墓のあるのが、あの麻呂子山だと言ふ。まろ子といふのは、尊い御一族だけに用ゐられる語で、おれの子といふほどの、意味であつた。ところが、其おことばが縁を引いて、此郷の山には、其後ソノ亦マタ、貴人をお埋め申すやうな事が、起つたのである。

だが、さう言ふ物語りはあつても、それは唯、此里の語部カタリベの姥ウバの口に、さう伝へられてゐる、と言ふに過ぎぬ古物語りフルであつた。纔ワッかに百年、其短いと言へる時間も、文字に縁遠い生活には、さ

ながら太古を考へると、同じ昔となつてしまつた。

旅の若い女ニヨシヤウ性は、型摺りカタズの大様な美しい模様をおいた著キる物を襲ヨソうて居る。笠は、浅い縁ヘリに、深い縹ハナダイロ色の布が、うなじを隠すほどに、さがつてゐた。

日は仲春、空は雨あがりの、爽サワやかな朝である。高原カウゲンの寺は、

人の住む所から、自ら遠く建つて居た。唯タダ凡オヨソ、百人の僧俗が、

寺ジチユウ中に起き伏して居る。其すら、引き続き供養饗キヤウエン宴エンの疲れで、今日はまだ、遅い朝を、姿すら見せずにある。

その女人は、日に向つてひたすら輝く伽藍の廻りを、残りなく歩いた。寺の南境ザカヒは、み墓山の裾から、東へ出てゐる長い崎の尽きた所に、大門はあつた。其中腹と、東の鼻とに、西塔・東塔が立

つて居る。丘陵の道をうねりながら登った旅びとは、東の塔の下に出た。

雨の後の水気の、立つて居る大和の野は、すつかり澄みきつて、
ワカヒル若 昼のきらきらしい景色になつて居る。右手の目の下に、集中

して見える丘陵はカタラカ傍岡で、ほの／＼と北へ流れて行くのが、

葛城川だ。平原の真中に、旅笠を伏せたやうに見える遠い小山は、

ミミナシ耳 無の山であつた。其右に高くつつ立つてゐる深緑は、畝傍山。

更に遠く日を受けてきらつく水面は、ハニヤス埴安の池ではなからうか。

其東に平たくて低い背を見せるのは、聞えたカグヤマ香具山なのだらう。

旅の女子フミナゴの目は、山々の姿を、一つ／＼にタド辿つてゐる。天香アメノカ

グヤマ具山をあれだと考へた時、あの下が、若いチチハハ父母の育つた、其

から、叔父叔母、又一族の人々の、行き来した、藤原の里なのだ。もう此上は見えぬ、と知れて居ても、ひとりで、爪先立て、伸び上げる気持ちになつて来るのが抑へきれなかつた。

香具山の南の裾に輝く瓦舎は、カハラヤ大官大寺に違ひない。其か

ら更に真南の、山と山との間に、薄く霞んでゐるのが、飛鳥の村

なのであらう。父の父も、母の母も、其又父母も、皆あのあたり

で生ひ立たれたのであらう。この国の女子フミナゴに生れて、一足も女

部屋を出ぬのを、美德とする時代に居る身は、親の里も、祖先

の土も、まだ踏みも知らぬ。あの陽炎カゲロフの立つてゐる平原を、此

足で、隅から隅まで歩いて見たい。

かう、その女ニヨシヤウ性は思つてゐる。だが、何よりも大事なことは、

此郎イラツメ女——貴女は、昨日の暮れ方、奈良の家を出て、こゝまで歩いて来てゐるのである。其も、唯のひとりでゝあつた。

家を出る時、ほんの暫し、心を掠カスめた——父君がお聞きになつたら、と言ふ考へも、もう気にはかゝらなくなつて居る。乳母があわてゝ探すだらう、と言ふ心が起つて来ても、却カヘツてほのかな、こみあげ笑ひを誘ふ位の事になつてゐる。

山はづつしりとおちつき、野はおだやかに畝ウネつて居る。かうして居て、何の物思ひがあらう。この貴アテな娘御ゴは、やがて後をふり向いて、山のなぞへについて、次第に首をあげて行つた。

二上山。あゝこの山を仰ぐ、言ひ知らぬ胸騒ぎ。——藤原・飛鳥の里々山々を眺めて覺えた、今の先の心とは、すつかり違つた胸

の悸トキメき。旅の郎女は、脇目も触らず、山に見入つてゐる。さうして、静かな思ひの充ちて来る満悦を、深く覺えた。昔びとは、確實な表現を知らぬ。だが謂はゞ、——平野の里に感じた喜びは、クワコシヤウ過去生に向けてのものであり、今此山を仰ぎ見ての驚きは、ライセ来世を思ふ心躍りだ、とも謂へよう。

塔はまだ、嚴重にやらひを組んだまゝ、人の立ち入りを禁イマシめてあつた。でも、ものに拘泥することを教へられて居ぬ姫は、何時イツの間にか、塔の初シヨヂユウ重の欄干に、自分のよりかゝつて居るのに、気がついた。さうして、しみ／＼と山に見入つて居る。まるで瞳が、吸ひこまれるやうに。山と自分とに繋ツナガる深い交渉を、又くり返し思ひ初めてゐた。

郎女の家は、奈良東城、右京三条第七坊にある。祖父オホチムチマロ武智麻呂の

こゝで亡くなつて後、父が移り住んでからも、大分の年月になる。

父は男ヲトコザカリ壯には、横佩ヨコハキの大將ダイシヤウと謂はれる程、一ふりの大オホ

刀チのさげ方にも、工夫を凝コらさずには居られぬだて者モノであつた。

なみの人の豎タテにさげて佩ハく大刀を、横ヨコへて吊る佩ハき方を案出した

人である。新しい奈良の都の住人は、まださうした官吏としての、

華奢キヤシヤな服装を趣向クノむまでに到つて居なかつた頃、姫の若い父は、

近代の時世装に思ひを凝コして居た。その家に覲タツねて来る古い留学

生や、新来イマキの帰化僧などに尋ねることも、張文成などの新作の物

語りの類を、問題にするやうなのとも、亦違チガうてゐた。

さうした闊クワツタツ達な、やまどごゝろの、赴ツクまゝにふるまうて居

る間に、才ザエスグ優れた族ウカラビト人が、彼を乗り越して行くのに気がつかなかつた。姫には叔父、彼——豊成には、さしつぎの弟、仲麻呂である。その父君も、今は筑紫に居る。尠スクナくとも、姫などはさう信じて居た。家族の半ナカバ以上は、太宰帥ダザイノソツのはな／＼しい生活の装ひとして、連れられて行つてゐた。宮廷から賜る資人トネリ・僉仗タチも、大貴族の家の門地の高さを示すものとして、美々しく著飾らされて、皆任地へついで行つた。さうして、奈良の家には、その年は亦とりわけ、寂しい若葉の夏が来た。

寂かな屋敷には、響く物音もない時が、多かつた。この家も世間どほりに、女部屋は、日あたりに疎ウトい北の屋にあつた。その西側に、小チヒサな薮シトミド戸があつて、其をつきあげると、方三尺位な牕マドにな

るやうに出来てゐる。さうして、其内側には、夏冬なしに簾が垂れてあつて、戸のあげてある時は、外からの隙見を禦フセいだ。

それから外廻ソトマハりは、家の広い外郭になつて居て、大炊屋オホヒヤもあれば、湯殿火焼ヒタき屋なども、下人の住ひに近く、立つてゐる。苑ソノと言はれる菜畠や、ちよつとした果樹園らしいものが、女部屋の窓から見える、唯一の景色であつた。

武智麻呂存ソソジヤウ生の頃から、此屋敷のことを、世間では、南家と呼び慣はして来てゐる。此頃になつて、仲麻呂の威勢が高まつて来たので、何となく其古い通称は、人の口から薄れて、其に替る称へが、行はれ出した様だつた。三条七坊をすつかり占めた大屋敷を、一垣内ヒトカキツ——一ヒトアザナ字と見做して、横ヨコ佩牆内ハキカキツと言う者が、

著しく殖えて来たのである。

その太宰府からの音づれが、久しく絶えたと思つてゐたら、都とは目と鼻の難波ナニハに、いつか還り住んで、遙かに筑紫の政を聴いてゐた帥ソウの殿であつた。其父君から遣ツカハされた家の子が、一ヒトクルマ車に積み余るほどの家づとを、家に残つた家族たち殊に、姫君にとつてはこんで来た。

山国の狭い平野に、一代々々都遷しのあつた長い歴史の後、こゝ五十年、やつと一つ処に落ちついた奈良の都は、其でもまだ、なか／＼整ふまでには、行つて居なかつた。

官庁や、大寺が、によつきり／＼、立つてゐる外は、貴族の屋敷が、処々むやみに場をとつて、その相間々々に、板屋や瓦屋が、

交りまじりに続いてゐる。其外は、広い水田と、畠と、存外多い
 荒蕪地の間に、人の寄りつかぬ塚や岩群イハムラが、ちらばつて見える
 だけであつた。兎や、狐が、大路小路を駆け廻る様なのも、毎日
 のこと。つい此頃も、朱雀シユジャクオホヂ大路の植ゑ木の梢を、夜になると、
 鼯鼠ムササビが飛び歩くと云ふので、一騒ぎした位である。

横佩家の郎女イラツメが、称讚シヨウサン浄土ジャウド仏ブツ撮受セフジユギヤウ經を写しはじめたの

も、其頃からであつた。父の心づくしの贈り物の中で、一番、姫
 君の心を饒ニギハヤヒやかにしたのは、此新訳の阿弥陀經イチクワン一卷であつた。

国の版図の上では、東に偏り過ぎた山国の首都よりも、太宰府ダイザイフは、
 遙かに開けてゐた。大陸から渡る新しい文物は、皆一度は、この
 遠トホの宮廷領ミカドを通過するのであつた。唐から渡つた書物などで、太

宰府ぎりに、都まで出て来ないものが、なか／＼多かつた。

学問や、芸術の味ひを知り初めた志の深い人たちは、だから、大唐までは望まれぬこと、せめて太宰府へだけはと、筑紫下りを念願するほどであつた。

南家の郎ナシケ イラツメ女の手に入つた称讚浄土経も、大和一国の大寺オホテラと言ふ大寺に、まだ一部も蔵せられて居ぬものであつた。

姫は、薮戸シトミド近くに、時としては机を立て、写経をしてゐることもあつた。夜も、侍女たちを寝静まらしてから、油アブラ火ラビの下で、一心不乱に書き写して居た。

百部は、夙ハヤくに写し果した。その後は、千部手写の発願をした。

冬は春になり、夏山と繁つた春日山も、既に黄葉モミヂして、其がもう

散りはじめた。蟋蟀コホロギは、昼も苑一面に鳴くやうになつた。佐保川の水を堰セき入れた庭の池には、遣ヤり水伝ひに、川千鳥の啼ナく日すら、続くやうになつた。

今朝も、深い霜朝を、何処からか、鴛鴦ウシの夫婦鳥ツマドリが来て浮んで居ります、と童女ワラハメが告げた。

五百部を越えた頃から、姫の身は、目立つてやつれて来た。ほんの纒ワッかの眠りをとる間も、ものに驚いて覚めるやうになつた。其でも、八百部の声を聞く時分になると、衰へたなりに、健康は定まつて来たやうに見えた。やゝ蒼アラみを帯びた皮膚に、心もち細つて見える髪が、愈々イヨイヨ黒く映ハえ出した。

八百八十部、九百部。郎女は侍女にすら、ものを言ふことを厭イトふ

やうになつた。さうして、昼すら何か夢見るやうな目つきして、うつとり薮戸シトミドごしに、西の空を見入つて居るのが、皆の注意をひくほどであつた。

實際、九百部を過ぎてからは筆も一向、はかどらなくなつた。二十部・三十部・五十部。心ある女たちは、文字の見えない自身たちのふがひなさを悲しんだ。郎女の苦しみを、幾分でも分けることが出来ように、と思ふからである。

南家の郎女が、宮から召されることになるだらうと言ふ噂が、京ウヘ・洛ラク外ケに広がつたのも、其頃である。屋敷中の人々は、上近ツカく事ツカへる人たちから、垣内カキツの隅に住む奴隸ヤツコ・婢メヤツコ奴の末にまで、顔を輝かして、此コとり沙汰ザタを迎へた。でも姫には、誰一人其を聞

かせる者がなかつた。其ほど、此頃の郎女は氣むつかしく、外目ヨソメに見えてゐたのである。

千部手写の望みは、さうした大願から立てられたものだらう、と言ふ者すらあつた。そして誰ひとり、其を否む者はなかつた。

南家の姫の美しい膚は、益マス々マス透きとほり、潤ウルんだ目は、愈イヨ々イヨ

大きく黒々と見えた。さうして、時々声に出して誦ジュする経の文が、モン

物の音ネに譬タトへやうもなく、さやかに人の耳に響く。聞く人は皆、自身の耳を疑うた。

去年の春分の日の事であつた。入り日の光りをまともに受けて、姫は正座して、西に向つて居た。日は、此屋敷からは、稍セツジ坤サルによつた遠い山の端ハに沈むのである。西空の棚雲の紫に輝く上で、落ラ

クジツ
 日は俄かに転クルメぎ出した。その速さ。雲は炎になつた。日は黄ワウゴ。
 シンマルガセ
 金の丸になつて、その音も聞えるか、と思ふほど鋭く廻つた。
 雲の底から立ち昇る青い光りの風――、姫は、ぢつと見つめて居
 た。やがて、あらゆる光りは薄れて、雲は霽ハれた。夕闇の上に、
 目を疑ふほど、鮮やかに見えた山の姿。二上山である。その二つ
 の峰の間に、ありくとシヤウゴン 荘 厳な人の倂アラハが、瞬間アラハ顕れて消えた。
アト
 後は、真暗な闇の空である。山の端も、雲も何もない方に、目を
コラ
 凝して、何時までも端坐して居た。
 郎女の心は、其時から愈々澄んだ。併し、極めて寂しくなり勝マサつ
 て行くばかりである。

ゆくりない日が、半年の後に再フタタビ来て、姫の心を無ムシヤウ上の歡喜に引

き立てた。其は、同じ年の秋、彼岸チユウニチ中日の夕方であつた。姫は、いつかの春の日のやうに、坐してゐた。朝から、姫の白い額の、故もなくひよめいた長い日の、後ノチである。二上山の峰を包む雲の上に、中秋の日の爛ランジュク熟した光りが、くるめき出したのである。雲は火となり、日は八ハッシヤク尺の鏡と燃え、青い響きの吹雪を、吹き捲マく嵐――。

雲がきれ、光りのしづまつた山の端は、細く金の外輪を靡ナヒかして居た。其時、男嶽ヲノカミ・女嶽メノカミの峰の間に、ありくと浮き出た
髪 頭 肩 胸――。

姫は又、あの梯を見ることが、出来たのである。

南家の郎イラツメ女の幸福な噂が、春風に乗つて来たのは、次の春であ

る。姫は別様の心躍りを、一月も前から感じて居た。さうして、日を数^トり初めて、ちようど、今日と言ふ日。彼岸中日、春^{シユンブン}分の空が、朝から晴れて、雲雀^{ヒバリ}は天に翔^{カケ}り過ぎて、帰ることの出来ぬほど、青雲が深々とたなびいて居た。郎女は、九百九十九部を写し終へて、千部目にとりついて居た。

日一日、のどかな温い春であつた。経巻の最後の行、最後の字を書きあげて、ほつと息をついた。あたりは俄かに、薄暗くなつて居る。目をあげて見る部^{シトミド}窓の外には、しとくと——音がした、つて居るではないか。姫は立つて、手づから簾をあげて見た。雨。苑の青菜が濡れ、土が黒ずみ、やがては瓦屋にも、音が立つて来た。

姫は、立つても坐ても居られぬ、焦躁に悶モダえた。併し日は、益々暗くなり、夕暮れに次いで、夜が来た。

茫然として、姫はすわつて居る。人声も、雨音も、荒れ模様クハハに加つて来た風の響きも、もう、姫は聞かなかつた。

七

南家の郎ナシケ イラツメ女の神隠カミカクしに遭つたのは、其夜ソノであつた。家人は、翌朝空が霽ハれ、山々がなごりなく見えわたる時まで、気がつかずに居た。

横佩^{ヨコハキカキツ}牆内に住む限りの者は、男も、女も、上^{ウハ}の空になつて、洛

中洛外を馳^ハせ求めた。さうした奔^{ハシ}り人^{ヒト}の多く見出される場処と言

ふ場処は、残りなく捜された。春日山の奥へ入つたものは、伊賀

境までも踏み込んだ。高^{タカ}円^{マド}山^{ヤマ}の墓原も、佐紀の沼地・雑木原も、

又は、南は山^{ヤマ}村^{ムラ}、北は奈良山、泉川の見える処まで馳せ廻つて、

戻る者も戻る者も、皆^{カラ}空^{アシ}足を踏んで来た。

姫は、何^ド処^コをどう歩いたか、覚えがない。唯家を出て、西へく

と辿つて来た。降り募るあらしが、姫の衣を濡^{ヌラ}した。姫は、誰に

も教はらないで、裾^{ハギ}を脛^{ハギ}まであげた。風は、姫の髪を吹き乱した。

姫は、いつとなく、髻^{モトドリ}をとり束ねて、襟から着物の中に、含^クみ入

れた。夜中になつて、風雨が止み、星空が出た。

姫の行くてには常に、二つの峰の並んだ山の立ち姿がはつきりと聳えて居た。毛孔の豎つやうな畏しい声を、度々聞いた。ある時は、鳥の音であつた。其後、頻りなく断続したのは、山の獣の叫び声であつた。大和の内も、都に遠い広瀬・葛城あたりには、人居などは、ほんの忘れ残りのやうに、山陰などにあるだけで、あとは曠野。それに――、本村を遠く離れた、時はづれの、人棲まぬ田居ばかりである。

片破れ月が、上つて来た。其が却て、あるいてゐる道の辺の凄さを照し出した。其でも、星明りで辿つて居るよりは、よるべを覚えて、足が先へくと出た。月が中天へ来ぬ前に、もう東の空が、ひいわり白んで来た。

夜のほの／＼明けに、姫は、目を疑ふばかりの現実に行きあつた。——横佩家の侍女たちは何時イツも、夜の起きぬけに、一番最初に目撃した物事で、日のよしあしを、占つて居るやうだつた。さう言ふ女どものふるまひに、特別に気は牽ヒかれなかつた郎女だけれど、よく其人々が、「今朝ケサの朝目アサメがよかつたから」「何と言ふ情ない朝目でせう」など、そは／＼と興奮したり、むやみに塞ぎこんだりして居るのを、見聞きしてゐた。

郎女は、生れてはじめて、「朝目よく」と謂つた語を、内容深く感じたのである。目の前に赤々と、丹塗ニヌりに照り輝いて、朝日を反射して居るのは、寺の大門ではないか。さうして、門から、更に中門が見とほされて、此もおなじ丹塗りに、きらめいて居る。

山裾の勾配に建てられた堂・塔・伽藍は、更に奥深く、^{アケ}朱に、青
 に、金色に、光りの棚雲を、幾重にもつみ重ねて見えた。朝目の
 すがしきは、其ばかりではなかつた。其寂寞^{セキバク}たる光りの海から、
 高く抽^{ヌキ}で、見える二上の山。
 淡海公^{タンカイコウ}の孫、大^{タイシ}織冠^{ヨククワン}には曾孫。藤氏族^{トウシゾク}長^{チヤウ}太宰帥、南^ナ
 家の豊成、其第一^{ダイイチ}孃子^{チヤウシ}なる姫である。屋敷から、一步はおろ
 か、女部屋を膝行^{ヒザザ}り出ることすら、たまさかにもせぬ、郎女^{イラツメ}の
 ことである。順道^{ジュンダウ}ならば、今頃は既に、藤原の氏神河内の枚^ヒ
^{ラフカ}岡の御神^{オンカミ}か、春日^{カスガ}の御社^{ミヤシロ}に、巫女^{ミコ}の君^{キミ}として仕へてゐるは
 ずである。家に居ては、男を寄せず、耳に男の声も聞かず、男の
 目を避けて、仄暗い女部屋に起き臥^フし、てゐる人である。世間の

事は、何一つ聞き知りも、見知りもせぬやうに、おふしたてられて来た。

寺の浄域が、奈良の内外ウチトにも、幾つとあつて、横佩牆内カキツと讚タタへられてゐる屋敷よりも、もつと広大なものだ、と聞いて居た。さうでなくても、経文の上に伝へた浄土の莊シヤウゴン嚴マをうつすその建て物の様は想像せぬではなかつた。だが目のあたり見る尊タダさは唯息を呑むばかりであつた。之コレに似た驚きの経験は曾て一度したことがあつた。姫は今其ソレを思ひ起して居る。簡素と豪奢ガウシヤとの違ひこそあれ、驚きの歡喜は、印象深く残つてゐる。

今の太上天皇様が、まだ宮廷の御あるじで居させられた頃、ハツサ八歳の南家の郎女イラツメは、童女ワラハメとして、初ハツの殿テンジャウ上ウをした。ボク穆

ボク々たる宮の内の明りは、ほのかな香気を含んで、流れて居た。昼すら真夜に等しい、御帳台のあたりにも、尊いみ声は、昭々^{セウセ}と珠を揺る如く響いた。物わきまへもない筈の、八歳の童女が感泣した。

「南家には、惜しい子が、女になつて生れたことよ」と仰せられた、と言ふ畏れ多い風聞が、暫らく貴族たちの間に、くり返された。其後十二年、南家の娘は、二十になつてゐた。幼いからの聡さ^{サト}にかはりはなく、玉・水^{スエシヤウ}精^{ハタチ}の美しさが益々^{クハハ}加つて来たとの噂が、年一年と高まつて来る。

姫は、大門の闕^{シキミ}を越えながら、童女^{ワラハメ}殿^{テン}上^{ジャウ}の昔^{カシコ}の畏さを、追想して居たのである。長い^{イシキミチ}磔^{シキミチ}道を踏んで、中門に届く間にも、

誰一人出あふ者がなかつた。恐れを知らず育てられた大貴族の郎女は、^{ツツマ}度しく併しのどかに、御堂々々を拝んで、岡の東塔に來たのである。

こゝからは、北大和の平野は見えぬ。見えたところで、郎女は、奈良の家を考へ浮べることも、しなかつたであらう。まして、家人たちが、神隠しに遭うた姫を、探しあぐんで居ようなどゝは、思ひもよらなかつたのである。唯うつとりと、塔の下から近々と仰ぐ、二上山の山肌に、^{ウツ}現し世の目からは見えぬ姿を^{オモ}惟ひ^ミ観ようとして居るのであらう。

此時分になつて、寺では、人の動きが繁くなり出した。^{ジンテウ}晨朝の勤めの間も、うとくして居た僧たちは、^{サワ}爽やかな朝の眼を^{ミヒラ}睜い

て、食^{ジキダウ}堂へ降りて行つた。奴婢^{ヌヒ}は、其^{ソレソレ}々もち場持ち場の掃除を励む為に、ようべの雨に洗つたやうになつた、境内の沙地^{スナヂ}に出て来た。

そこにござるのは、どなたぞな。

岡の陰から、恐る／＼頭をさし出して問うた一人の寺奴^{ヤツコ}は、あるべからざる事を見た様に、自分自身を咎^{トガ}めるやうな声をかけた。

女人の身として、這^{ハヒ}入ることの出来ぬ結界を犯してゐたのだつた。姫は答へよう、とはせなかつた。又答へようとしても、かう言ふ時に使ふ語には、馴れて居らぬ人であつた。

若^モし又、適当な語を知つて居たにしたらところで、今はそんな事に、考^{ミダ}へを紊^{ミダ}されては、ならぬ時だつたのである。

姫は唯、山を見てゐた。依然として山の底に、ある佛を觀じ入つてゐるのである。寺奴ヤッコは、二言コトとは問ひかけなかつた。一晚のさすらひでやつれては居ても、服装から見ても、どうした身分の人か位の判断は、つかぬ筈はなかつた。又暫らくして、四五人のアシオト登音が、びた／＼と岡へ上つて来た。年のいつたのや、若い僧たちが、ばら／＼と走つて、塔のやらひの外まで来た。

こゝまで出て御座れ。そこは、男でも這入るところではない。
ニヨニン 女人は、とつとゝ出てお行きなされ。

姫は、やつと気がついた。さうして、人とあらそはぬ癖をつけられた貴族の家の子は、重い足を引きながら、竹垣の傍まで来た。

見れば、奈良のお方さうなが、どうして、そんな処にいらつ

しやる。

それに又、どうして、こゝまでお出でだった。伴の人も連れずに――。

口々に問うた。男たちは、咎める口とは別に、心はめいゝ、貴い女性をいたはる気持ちになつて居た。

山ををがみに……。

まことに唯一ヒトコト詞タウ。当の姫すら思ひ設けなんだ詞コトバが、匂ふが如く出た。貴族の家庭の語と、凡下ボンゲの家々の語とは、すつかり變つて居た。だから言ひ方も、感じ方も、其ソノうえ、語其ものさへ、郎女の語が、そつくり寺の所化輩シヨケハイには、通じよう筈がなかつた。

でも、其でよかつたのである。其でなくて、語の内容が、其まゝ

受けとられようものなら、南家の姫は、即座に氣のふれた女、と思はれてしまつたであらう。

それで、御館はミタチどこぞな。

みたち……。

おうちは……。

おうち……。

おやかたは、と問ふのだよ——。

をゝ。家はとや。右京藤原南家……。

俄然として、群集の上にぎはめきが起つた。四五人だつたのが、あとから後から登つて来た僧たちも加つて、二十人以上にもなつて居た。其が、口々に喋り出したものである。

ようべの嵐に、まだ残りがあつたと見えて、日の明るく照つて居る此小昼コビルに、又風が、ぎはつき出した。この岡の崎にも、見おろす谷にも、其から二上山へかけての尾根ヲネ々々にも、ちらほら白く見えて、花の木がゆすれて居る。山の此方コナタにも小桜の花が、咲き出したのである。

此時分になつて、奈良の家では、誰となく、こんな事を考へはじめてゐた。此はきつと、里方の女たちのよくする、春の野遊びに出られたのだ。——何時イツからとも知らぬ、習ナラハしである。春秋の、日と夜と平分ヘイブンする其頂上に当る日は、一日、日の影を逐オうて歩く風が行はれて居た。どこまでもどこまでも、野の果て、山の末、海の渚ナギサまで、日を送つて行く女衆が多かつた。さうして、夜に入

つてくたくくになつて、家路を戻る。此コソシキタ為来りを何時となく、女たちの咄ハナすのを聞いて、姫が、女の行ギヤウとして、この野遊びをする気になられたのだ、と思つたのである。かう言ふ、考へに落ちつくど、ありやうもない考へだと訣ワカつて居ても、皆の心が一時、ほうと軽くなつた。

ところが、其日も昼さがりになり、段々ユフカゲ夕光の、催して来る時刻が来た。昨日は、駄目になつた日の入りの景色が、今日は中チユウ日ニチにも劣るまいと思はれる華やかさで輝いた。横佩家の人々の心は、再重フタタビくなつて居た。

八

奈良の都には、まだ時をり、石城シキと謂はれた石垣を残して居る家の、見かけられた頃である。度々の太政官ダイシヤウグワン符で、其を家の周マハりに造ることが、禁ぜられて来た。今では、宮廷より外には、石シ城キを完全にとり廻した豪族の家などは、よくくの地方でない限りは、見つからなくなつて居る筈なのである。

其に一つは、宮廷の御在所が、御一代々々々に替つて居た千数百年の歴史の後に、飛鳥アスカの都は、宮殿の位置こそ、数町の間をあちこちせられたが、おなじ山河一帯の内にあつた。其で凡オヨソ、都遷しのなかつた形になつたので、後アトからく地割りが出来て、相応な

都城トシヤウの姿は備へて行つた。其数朝の間に、旧族の屋敷は、段々、家構へが整うて来た。

葛城に、元のまゝの家を持つて居て、都と共に一代ぎりの、屋敷を構へて居た蘇我臣ソガノオミなども、飛鳥の都では、次第に家作りを拵げて行つて、石城シキなども高く、幾重にもとり廻して、凡永久オヨソの館作りをした。其とおなじ様な気持ちから、どの氏でも、大なり小なり、さうした石城シキづくりの屋敷を構へるやうになつて行つた。蘇我臣ヒトナガ一流モツトモれで最栄えた島の大臣家オトドケの亡びた時分から、石城シキの構へは禁められ出した。

この国のはじまり、天から授けられたと言ふ、宮廷に伝はる神の御詞ミコトバに背く者は、今もなかつた。が、書いた物の力は、其が、

どのやうに由緒のあるものでも、其ほどの威力を感じるに到らぬ時代が、まだ続いて居た。

其飛鳥の都も、高タカマノハラ天原ヒロヌヒメノミコトサマ広野ノミコトサマ姫尊様の思召しで、其から一

里北の藤井个原に遷され、藤原の都と名を替へて、新しい唐モロコシ

様ヤウの端キラキラ正しさを尽した宮殿が、建ち並ぶ様になつた。近い飛

鳥から、新渡来イマキの高麗馬コロマに跨つて、馬上で通ふ風流士タハレヲもあるには

あつたが、多くはやはり、鷺栖サギスの阪の北、香具山の麓から西へ、

新しく地割りせられた京ケイジヤウ城マチマチの坊々に屋敷を構へ、家造りを

した。その次の御代になつても、藤原の都は、日に益マし、宮殿が

建て増されて行つて、こゝを永宮トコミヤと遊ばす思召しが、伺はれた。

その安堵の心から、家々の外ソトには、石城を廻すものが、又ぼつ／

“ \ 出て来た。さうして、そのはやり風俗が、見る／＼うちに、
 また氏々の族長の家囲ひを、あらかた石にしてしまつた。その頃
 になつて、アメナムネトヨホヂノミコトサマ 天真宗豊祖父尊様ミオヤがおおくれになり、御母ヤ日
マトネコアマツミヨトヨクニナスヒメ 本根子天津御代豊国成姫オホミコトサマの大尊様がお立ち遊ばした。その
 四年目思ひもかけず、奈良の都に宮遷しがあつた。ところがまる
 で、追つかけるやうに、藤原の宮は固より、目ぬきの家並みが、
 不意の出火で、其こそ、あつと言ふ間に、痕形もなく、空ソラの有モノと
 なつてしまつた。もう此頃になると、ダイジャウグワンブ 太政官符キビに、更に厳し
コトワキ い添書コトワキがついて出ずとも、氏々の人は皆、目の前のすばやい人
 事自然の交錯したテンベン 転変テンベンに、目を瞠ミハるばかりであつたので、久し
シキ い石城シキの問題も、其で、解決がついて行つた。

古いウヂスジヤウ氏種姓を言ひ立て、神代以来の家職の神聖を誇つた者どもは、其家職自身が、新しい藤原奈良の都には、次第に意味を失つて来てゐる事に、気がついて居なかつた。

モツトモ

最早くそこに心づいた、姫の祖父タンカイコウ淡海公などは、古き神秘を誇つて来た家職を、末代まで伝へる為に、別に家を立て、中臣の名を保たうとした。さうして、自分・子供ら・孫たちと言ふ風に、いちはやく、新しいツカサビト官人の生活に入り立つて行つた。

ことし、四十を二つ三つ越えたばかりのオホトモノヤカモチ大伴家持は、父旅人タビトの其年頃よりは、もつと優れた男ぶりであつた。併し、世の中はもう、すっかり變つて居た。見るもの障サハるもの、彼の心を苛イラつかせる種にならぬものはなかつた。淡海公の、小百年前に実行して

居る事に、今はじめて自分の心づいた鈍^{オツ}ましさが、憤らずに居られなかつた。さうして、自分とおなじ風の性向の人の成り行きを、まぎ／＼省みて、慄然とした。現に、時に誇る藤原びとでも、まだ昔風の夢に泥^{ナツ}んで居た南家の横佩右大臣は、さきをとゝし、太宰員外帥^{キングワイノソツ}に貶^{オト}されて、都を離れた。さうして今は、難波で謹慎してゐるではないか。自分の親旅人も、三十年前に踏んだ道である。

世間の氏^{ウヂノ}上^ノ家^{カミケ}の主人^{アルジ}は、大方もう、石城^{シキ}など築^{キツ}き廻^{マハ}して、大門小門を繋ぐと謂つた要害と、裝飾とに、興味を失ひかけて居るのに、何とした自分だ。おれはまだ現に、出来るなら、宮廷のお目こぼしを頂いて、石に囲はれた家の中で、家の子どもを集め、氏^{ウヂ}

チビト 人たちを召びつどへて、弓場ユバに精励させ、棒術ホコユケ・大刀かきに
 シユツセイ 出 精 させよう、と謂つたことを空想して居る。さうして年トシド
 シ 頻繁に、氏神ソノホカ其外の神々を祭つてゐる。其度毎ソノタビゴトに、家の
 カタリベ 語 部 大伴語造カタサツノムナの姫たちを呼んで、之コレに捉ツカへ処マドもない昔代ムカシヨの物
 ウチビト 語りをさせて、氏人ウチビトに傾聴シを強ひて居る。何だか、空クウな事に力
 を入れて居たやうに思へてならぬ寂しさだ。
 だが、其氏神祭りや、祭りの後宴ゴエンに、大勢オホゼイの氏人ウチビトの集ること
 は、とりわけやかましく言はれて来た、三四年以来の法度ハツトである。
 こんな溜め息を洩しながら、大伴氏の旧フルい習しを守つて、どこま
 でも、宮廷守護の為の武道の伝襲に、努める外はない家持だつた
 のである。

越^{エツチユウノカミ}中守として踏み歩いた越路^{コンヂ}の泥のかたが、まだ行^{ムカバキ}滕か

ら落ちきらぬ内に、もう復^{マタ}、都を離れなければならぬ時の、迫つ

て居るやうな気がして居た。其^{ソノウチ}中、此針^{ムシロ}の筵の上で、兵部少輔^{ヒヤウブセフ}

から、大輔^{タイフ}に昇進した。そのことすら、益々脅迫感を強める方に

ばかりはたらいた。

今年五月にもなれば、東大寺の四天王像の開^{カイゲン}眼が行はれる筈で、

奈良の都の貴族たちには、すでに寺から内見を願つて来て居た。

さうして、忙しい世の中にも、暫らくはその評判が、すべてのい

ざござをおし鎮める程に、人の心を浮き立たした。本朝^{ホントウ}出来の

像としてはまづ、此程物凄い天部^{テンブ}の姿を拝んだことは、はじめ

だ、と言ふものもあつた。神代の荒^{アラガミ}神たちも、こんな形^{ギヤウサウ}相

でおありだつたらう、と言ふ噂も聞かれた。

まだ公オホヤケの供養もすまぬのに、人の口はうるさいほど、頻繁に流説をふり撒マいてゐた。あの多聞天と、広目天との顔つきに、思ひ当るものがないか、と言ふのであつた。此はこゝだけの咄ハナシだよ、と言つて話したのが、次第に広まつて、家持の耳までも聞えて来た。なるほど、憤怒フンスの相サウもすさまじいにはすさまじいが、あれがどうも、当今大倭ヤマト一だと言はれる男たちの顔、そのまゝだと言ふのである。貴人は言はぬ、かう言ふ種類の噂は、えて供をして見て来た道ミチ々ミチの博士ハカセたちと謂つた、心蔑サモしいものゝ、言ひさうな事である。

多聞天は、大師藤原恵美中卿タイシ エミチュウケイだ。あの柔和な、五十を越しても

まだ、三十代の美しさを失はぬあの方が、近頃おこりつぽくなつて、よく下官や、仕^{ツカ}へ人^{ビト}を叱るやうになつた。あの円満^{ウマ}し人^{ビト}が、どうしてこんな顔つきになるだらう、と思はれる表情をすることがある。其面^{オモ}もちそつくりだ、と尤^{モツトモ}らしい言ひ分なのである。さう言へば、あの方が壯^{ワカザカ}盛^{ホコユケ}りに、棒術^{コノ}を嗜^{ホコユケ}んで、今にも事あれかしと謂つた顔で、立派^{ヨロヒ}な甲^{ヨロヒ}をつけて、のつし／＼と長い物を杖^ツいて歩かれたお姿が、あれを見てゐて、ちらつくやうだなどと相^{アヒツチ}槌^{ツチ}をうつ者も出て来た。

其では、広目天の方はと言ふと、

さあ、其がの――。

と誰に言はせても、ちよつと言ひ洩るやうに、困つた顔をして見

せる。

実は、ほんの人の噂だかの。噂だから、保証は出来ぬかの。

義淵僧正の弟子の道鏡法師に、似てるぞなど言ふがや。……

けど、他人ヒトに言はせると、——あれはもう、二十幾年にもな

るかいや——筑紫で伐たれなされたセンダザイノセウニ前太宰少弐——藤原広嗣

——の殿トノに生写シヤウウツしぢや、とも言ふがいよ。

わしには、どちらとも言へんかの。どうでも、見たことのある

お人に似て居さつしやるには、似てゐさつしやるげなが……

…。

何しろ、此二つの天部テンブが、互に敵視するやうな目つきで、睨ニラみあ

つて居る。噂を気にした住侶たちが、色々に置き替へて見たが、

どの隅からでも、互に相手の姿を、マナジリ 眦を裂いて見つめて居る。とう／＼あきらめて、自然にとり沙汰の消えるのを待つより為方がない、と思ふやうになつたと言ふ。

若しや、モ 天下に大乱でも起らなければえゝが――。

こんな呟きは、ササヤ 何時までもイツ 続きさうに、時と共に倦まずに語られた。

前少弐殿ゼンでなくて、弓削新発意ユゲシンボチの方であつてくれゝば、いつ

そ安心だがなあ。あれなら、事を起しさうな房主バウズでもなし。

起したくても、起せる身分でもないぢやまで――。

言ひたい傍ハウダイ題な事を言つて居る人々も、たつた此一つの話題を持ちあぐね初めた頃、噂の中の大師惠美朝臣エミノアソンの姪の横佩家メヒの郎イラツ

女が、神隠しに遭うたと言ふ、人の口の端に、旋風ツジカゼを起すやうな事件が、湧き上つたのである。

九

兵部大輔ヒヤウブタイフ大伴家持は、偶然この噂を、極めて早く耳にした。ちようど、春シユンブン分ブンから二日目の朝、朱雀大路を南へ、馬をやつて居た。二人ばかりの資人トネリが徒歩カチで、驚くほどに足早について行く。此は、晋唐コレの新しい文学の影響を、受け過ぎるほど享ウけ入れた文人かたぎの彼には、数年来珍しくもなくなつた癖である。かうし

て、何処^{ドコ}まで行くのだらう。唯、朱雀の並み木の柳の花がほゞけて、霞のやうに飛んで居る。向うには、低い山と、細長い野が、のどかに陽炎^{カゲロ}ふばかりである。

資人^{トネリ}の一人が、とつと追ひついて来たと思ふと、主人の鞍^{クラ}に顔をおしつける様にして、新しい耳を聞かした。今行きすがうた知り人の口から、聞いたばかりの噂である。

それで、何か――。娘御の行くへは知れた、と言ふのか。

はい……。いゝえ。何分、その男がとり急いで居りまして。

この間抜け。話はもつと上手に聴くものだ。

柔らかく叱つた。そこへ今^モ一人の伴^{トモ}が、追ひついて来た。息をきらしてゐる。

ふん。汝は聞き出したね。南家の嬢子は、どうなつた——。

出端に油かけられた資人は、表情に隠さず心の中を表した此頃の人の、自由な咄し方で、まともに鼻を蠢して語つた。

当麻の邑まで、をとゝひ夜の中に行つて居たこと、寺からは、昨日午後横佩墻内へ知らせが届いたこと其外には、何も聞きこむ間のなかつたことまで。家持の聯想は、環のやうに繋つて、暫らくは馬の上から見る、街路も、人通りも、唯、物として通り過ぎるだけであつた。

南家で持つて居た藤原の氏上職が、兄の家から、弟仲麻呂——押勝——の方へ移らうとしてゐる。来年か、再来年の枚岡祭りに、参向する氏人の長者は、自然かの大師のほか、人がなくなつ

て居る。恵美家^{エミケ}からは、嫡子久須麻呂^{クスマロ}の為、自分の家の第一嬢子をくれとせがまれて居る。先日も、久須麻呂の名の歌が届き、自分の方でも、娘に代つて返し歌を作つて遣した。今朝^{ケサ}も今朝、又折り返して、男からの懸想文^{ケサウブミ}が、来てゐた。

その婿候補^{ムコガネ}の父なる人は、五十になつても、若かつた頃の容色に頼む心が失せず^{イカ}にゐて、兄の家娘にも執心は持つて居るが、如何に何でも、あの郎女^{イカ}だけには、とり次げないで居る。此は、横佩家へも出入りし、大伴家へも初中終^{シヨツチユウ}来る古刀自^{フルトジ}の、人のわるい内証話であつた。其を聞いて後、家持自身も、何だか好奇心に似たものが、どうかすると頭を擡^{モタ}げて来て困つた。仲麻呂は今年、五十を出てゐる。其から見れば、ひとまはりも若いおれなどは、

思ひ出にまう一度、此句ニホヒやかな貌カホバナ花を、垣内カキツの坪苑ツボに移せぬ限りはない。こんな当時の男が、皆持った心をどりに、はなやいだ、明るい気がした。

だが併し、あの郎女は、藤原四家の系統スヂで一番、神さカムびたたちを持つて生れた、と謂はれる娘御である。今、枚岡ヒラフカの御神オンカミに仕へて居る齋イツき姫ヒメの罷ヤめる時が来ると、あの嬢子フトメが替つて立つ筈だ。其で、貴い所からのお召しにも応じかねて居るのだ。……結局、誰も彼も、あきらめねばならぬ時が来るのだ。神の物は、神の物——。横佩家の娘御は、神の手に落ちつくのだらう。

ほのかな感傷が、家持の心を浄めて過ぎた。おれは、どうもあきらめが、よ過ぎる。十トウを出たばかりの幼さで、母は死に、父は疾ヤ

んで居る太宰府へ降つて、夙ハヤくから、海の彼方アナタの作り物語りや、

モロコシウタ唐詩ソのをかしさを知り初めたのが、病みつきになつたのだ。

死んだ父も、さうした物は、或アルヒは、おれよりも嗜スきだつたかも知

れぬほどだが、もつと物に執シフヂヤク著シフヂヤクが深かつた。現に、大伴の家

の行く末の事なども、父はあれまで、心を悩まして居た。おれも

考へれば、たまらなくなつて来る。其で、氏人サトを集めて諭したり、

歌を作つて訓諭して見たりする。だがさうした後の気持ちの爽や

かさは、どうしたことだ。洗ひ去つた様に、心が、すつとしてし

まふのだつた。まるで、初めから家の事など考へて居なかつた、

とおなじすが／＼しい心になつてしまふ。

あきらめと言ふ事を、知らなかつた人ばかりではないか。……昔

物語りに語られる神でも、人でも、傑スゲれた、と伝へられる限りの方々は——。それに、おれはどうしてかうだろう。

家持の心は併し、こんなに悔恨に似た心持ちに沈んで居るに繋らず、段々気にかゝるものが、薄らぎ出して来てゐる。

ほう　これは、京キャウ極ハテまで来た。

朱雀大路オホヂも、こゝまで来ると、縦横に通る地割りの太い路筋ばかりが、白々として居て、どの区画にも区画にも、家は建つて居ない。去年の草の立ち枯れたのと、今年生えて稍茎ヤヤを立て初めたのとがまじりあつて、屋敷地から喰ハみ出し、道の上までも延びて居る。

　　こんな家が——。

驚いたことは、そんな草原の中に、唯一つ大きな構への家が、建ちかゝつて居る。遅い朝を、もう余程、今日の為事に這入つたらしい木の道の者たちが、骨組みばかりの家の途中で、立ちはたらいて居るのが見える。家の建たぬ前に、既に屋敷廻りの地形デギヤウが出て来て、見た目にもさつぱりと、垣をとり廻して居る。

土を積んで、石に代へた垣、此頃言ひ出した築土垣ツキヒデガキといふのは、此だな、と思つて、ちつと目をつけて居た。見るく、さうした新しい好尚コノミのおもしろさが、家持の心を奪うてしまった。

築土垣ツキヒデガキの処々に、きりあけた口があつて、其に、門が出来て居た。さうして、其処から、頻りに人が繋ツナガつては出て来て、石を曳く。木を搬モつ。土を搬び入れる。重苦しい石城シキ。懐しい昔構へ。

今も、家持のなくなしたくなく考へてゐる屋敷廻りの石垣が、思つてもたまらぬ重圧となつて、彼の胸に、もたれかゝつて来るのを感じた。

おれには、だが、この築土垣をト払ることが出来ぬ。

家持の乗馬ジヨウメフタタビは再、憂鬱に閉された主人を背に、引き返して、五条まで上つて来た。此辺から、右京の方へ折れこんで、坊角マチカドを廻りくねりして行く様子は、此主人に馴れた資人トネリたちにも、胸の測られぬ気を起させた。二人は、時々顔を見合せ、目くばせをしながら尚ナホ、了解が出来ぬ、と言ふやうな表情を交カハしかはし、馬の後を走つて行く。

こんなにも、變つて居たのかねえ。

ある坊角マチカドに来た時、馬をぴたと止めて、独り言のやうに言つた。

……旧草フルクサに 新草ニヒクサまじり、生オひば 生ふるかに——だな。

近頃見つけた歌カブシヨ舞所の古記録「東アツマウタ歌」の中に見た一首がふと、

此時、彼の言ひたい気持ちをも、代作して居てくれてゐたやうに、思ひ出された。

さうだ。「おもしろき野ヌをば 勿ナ焼きそ」だ。此でよいのだ。けぐんな顔を仰アフムけてゐる伴トモビト人らに、柔和な笑顔を向けた。

さうは思はぬか。立ち朽グサりになつた家の間に、どし／＼新しい屋敷が出来て行く。都は何時イツまでも、家は建て詰まぬが、其ソレでもどちらかと謂へば、減るよりも殖フえて行つてゐる。

此辺は以前、今頃になると、蛙めの、あやまりたい程鳴く田

の原が、続いてたもんだ。

オツシヤ

仰るとほりで御座ります。春は蛙、夏はくちなは、秋は蝗イナゴま

ろ。此辺はとても、歩けたところでは、御座りませんでした。
今一人が言ふ。

建つ家もたつ家も、この立派さは、まあどうで御座りませう。

其に、どれも此も、此頃急にはやり出した築ツキヒチガキ土垣キツを築きま

はしまして。何やら、以前とはすつかり変つた処に、参つた
気が致します。

馬上の主人も、今まで其ソレばかり考へて居た所であつた。だが彼の

心は、瞬間明るくなつて、先年ミカタノオホキミ形王ウタゲチスサの御殿での宴に誦ん

だ即興が、その時よりも、今はつきりと内容を持つて、心に浮ん

で来た。

うつり行く時見る毎に、心イタ疼く 昔の人し 思ほゆるかも

目をあげると、東の方カスガ春日の杜モリは、谷陰になつて、こゝからは見

えぬが、御蓋山ミカサ・高タカマド円山一帯、頂が晴れて、すばらしい春日ハルビヨ

和リになつて居た。

あきらめがさせるのどけさなのだ、とすぐ気がついた。でも、彼

の心のふさぎのむしは迹アトを潜めて、唯、まるで今歩いてゐるのが、

大日本平城京オホヤマトヘイセイケイの土ではなく、大唐ダイタウ長安の様な錯覚の

起つて来るのが押マタガへきれなかつた。此馬がもつと、毛並みのよい

純白の馬で、跨マタガつて居る自身も亦、若々しい二十代の貴公子の気

がして来る。神々から引きついで来た、重苦しい家の歴史だの、

夥しい数の氏人などから、すつかりキ截り離されて、自由な空にか
 けて居る自分でゞもあるやうな、豊かな心持ちが、暫らくは払
 つてもく、消えて行かなかつた。

おれは若くもなし。第一、海東の大日本オホヤマトビト人である。おれには、
 憂鬱な家職が、ひしくと、肩のつまるほどかゝつて居るのだ。

こんなことを考へて見ると、寂しくはかない気もするが、すぐ
 に其は、自身と関係のないことのやうに、心は饒ニギはしく和らいで
 来て、為方シカタがなかつた。

をい、汝ワケたち。大伴氏ウヂノカミケ上家も、築土垣を引き廻さうかな。

とんでもないことを仰せられます。

二人の声が、おなじ感情からホトバシ迸り出た。

年の増した方の資人トネリが、切実な胸を告白するやうに言つた。

私どもは、御譜第では御座りません。でも、大伴と言ふお名

は、御門御垣ミカドミカキと、関係深い称へだ、と承つて居ります。大伴

家からして、門垣を今様にする事になつて御覧ゴラウじませ。御一

族の末々まで、あなた様をお呪ノロひ申し上げることでござりま

せう。其どころでは、御座りません。第一、ほかの氏々――

大伴家よりも、ぐんと歴史の新しい、人の世になつて初まつ

た家々の氏人までが、御一族を蔑ナイガシロに致すことになりませう。

こんな事を言はして置くと、折角澄みかゝつた心も、又曇つて来

さうな気がする。家持は忙てゝ、資人の口を緘トめた。

うるさいぞ。誰に言ふ語だと思つて、言つて居るのだ。やめ

ぬか。雑談だ。雑談を真に受ける奴が、あるものか。

馬はやつぱり、しつとくと、歩いて居た。築土垣 築土垣。又、築土垣。こんなに何時の間に、家構へが替つて居たのだらう。家持は、なんだか、晩かれ早かれ、ありさうな氣のする次の都——どうやらかう、もつとおつぴらいた平野の中の新京城にでも、来てゐるのでないかと言ふ氣が、ふとしかゝつたのを、危く喰ひとめた。

築土垣 築土垣。もう、彼の心は動かなくなつた。唯、よいとする氣持ちと、よくないと思はうとする意思との間に、氣分だけが、あちらへ寄りこちらへよりしてゐるだけであつた。

何時の間にか、平群の丘や、色々な塔を持つた京西の寺々の

見渡される、三条辺の町尻に来て居ることに気がついた。

これはく。まだこゝに、残つてゐたぞ。

珍しい発見をしたやうに、彼は馬から身を翻^{カヘ}しておりた。二人の

資人はすぐ、馳け寄つて手綱を控へた。

家持は、門と門との間に、細かい柵をし囲らし、目隠しに^{カラタチ} 枳

殻^{バナ}の叢生^{ヤフ}を作つた家の外構への一個処に、まだ石城^{シキ}が可なり広

く、人丈^{ヒトタケ}にあまる程に築いてあるそばに、近寄つて行つた。

荒れては居るが、こゝは横佩^{ヨコハキ}牆^{カキツ}内だ。

さう言つて、暫らく息を詰めるやうにして、石垣の荒い面を見入つて居た。

さうに御座ります。此石城^{シキ}からしてついた名の、横佩^{ヨコハキ}牆^{カキツ}内だ

と申しますとかで、せめて一ところだけは、と強ひてとり毀コボたないとか申します。何分、帥ソウの殿のお都入りまでは、何としても、此儘コノママで置くので御座りませう。さやうに、人が申し聞けました。はい。

何時イツの間にか、三条七坊まで来てしまつてゐたのである。

おれは、こんな処へ来ようと言ふ考へはなかつたのに――。だが、やつぱり、おれにはまだ／＼、若い色好みの心が、失せないで居るぞ。何だか、自分で自分をなだめる様な、反省らしいものが出て来た。

其にしても、静か過ぎるではないか。

さやうで。で御座りますが、郎女のお行くへも知れ、乳母も

そちらへ行つたとか、今も人が申しましたから、落ちついたので御座りませう。

詮索ずきさうな顔をした若い方が、口を出す。

いえ。第一、こんな場合は、騒ぐといけません。騒ぎにつけこんで、悪い魂タマや、霊モが、うよくくとつめかけて来るもので御座ります。この御館ミタチも、古いおところだけに、心得のある長老オトナの一人や、二人は、難波へも下らずに、留守に居るので御座りませう。

もうよい／＼。では戻らう。

十

をとめの閨戸ネヤドをおとなふ風フウは、何も、珍しげのない国中シキタの為来りであつた。だが其にも、曾てはさうした風カッの、一切行はれて居なかつたことを、主張する村々があつた。何時イツのほどにか、さうした村が、他村の、別々に守つて来た風習と、その古い為来りとをふり替へることになつたのだ、と言ふ。かき上る段になれば、何の雑作ザフサもない石城シキだけれど、あれを大昔からとり廻して居た村と、さうでない村とがあつた。こんな風に、しかつめらしい説明をする宿老トネたちが、どうかすると居た。多分やはり、語部カタリベなどの昔語りから、来た話なのであらう。踏み越えても這入れ相ハヒサウに見える

石垣だが、大昔交カハされた誓ひで、目に見えぬ鬼神モノから、人間に到るまで、あれが形だけでもある限り、入りこまぬ事になつてゐる。こんな約束が、人と鬼モノとの間にあつて後、村々の人は、石城シキの中に、ゆつたりと棲むことが出来る様になつた。さうでない村々では、何者でも、垣を躍り越えて這入つて来る。其は、別の何かのシカタ為方で、防ぐ外はなかつた。祭りの夜でなくても、村なかの男は何の憚りなく、垣を踏み越えて処女の薨戸シトミをほとくと叩く。石城キを囲うた村には、そんなことは、一切なかつた。だから、美しクワメ女メの家に、奴隷ヤツコになつて住みこんだ古イニシの貴シびともあつた。娘の父にこき使はれて、三年五年、いつか処女に会はれよう、と忍び過した、身にしむ恋物語りもあるくらゐだ。石城シキを掘り崩すのは、

何処からでも鬼神モノに入りこんで来い、と呼びかけるのと同じことだ。京の年よりもあつたし、田舎の村々では、之コレを言ひ立てに、ちつとでも、石城を残して置かうと争うた人々が、多かつたのである。

さう言ふ家々では、实例として恐しい証拠を挙げた。卅年も昔、

——天平八年嚴命が降つて、何事も命令のはか／＼しく行はれぬのは、朝臣テウシンサキダが先つて行はぬからである。汝等ミマシタチ進んで、石城シキを毀つて、新京の時世装に叶カナうた家作りに改めよと、仰せ下された。藤氏四流の如き、今に旧態を易カへざるは、最其位モツトモチに在るを顧みざるもので、とお咎トガめが降つた。此時一度、凡スベテ、石城シキはとり毀コボたれたのである。ところが、其と時を同じくして、瘡瘡モガサがはやり

出した。越えて翌年、益々盛んになつて、四月北家を手初めに、京家・南家と、主人から、まづ此時疫ジエキに亡くなつて、八月にはとうく、式家の字ウマカヒキヤウ合卿タフまで仆れた。家に、防ぐ筈の石城シキが失せたからだど、天下中の人が騒いだ。其でまた、とり壊した家も、ぼつ／＼モト旧トに戻したりしたことであつた。

こんなすさまじい事も、あつて過ぎた夢だ。けれどもまだ、まぎ／＼と人の心に焼きついて離れぬ、現ウツツの恐しさであつた。

其は其として、昔から家の娘を守つた邑ムラムラ々々も、段々えたいの知れぬ村の風カマに感染カマけて、忍ツマび夫の手に任せ傍ハウダイ題タイにしようとしてゐる。さうした求婚ツマドヒの風を伝へなかつた氏々の間では、此は、忍ツマび難い流行であつた。其でも男たちは、のどかな風俗を喜んで、

何とも思はぬやうになつた。が、家庭の中では、母・妻・乳母^{オモ}たちが、いまだにいきり立つて、さうした風儀になつて行く世間を、呪ひやめなかつた。

手近いところで言うても、大伴宿禰^{スクネ}にせよ。藤原朝臣^{アソシ}にせよ。さう謂ふ妻どひの式はなくて、数十代宮廷をめぐつて、仕へて来た邑々のあるじの家筋であつた。

でも何時^{イツ}か、さうした氏々の間にも、妻迎への式には、

八千矛の神のみことは、とほ／＼し、高志^{コシ}の国に、美し女^{クハメ}をありと聞かして、賢^{サカ}し女^メをありと聞^{キコ}して……

から謡ひ起す神語^{カミガタリウタ}歌を、語部に歌はせる風が、次第にひろまつて来るのを、防ぎとめることが出来なくなつて居た。

南家の郎イラツメ女にも、さう言ふ妻ツママ覓ぎ人が——いや人ヒトムレ群が、とりまいて居た。唯、あの型ばかり取り残された石城シキの為に、何だか屋敷へ入ることが、物忌み——たぶう——を犯すやうな危殆ヒアヒな心持ちで、誰も彼も、柵まで又、門まで来ては、かいまみしてひき還すより上の勇氣が、出ぬのであつた。

通カヨはせ文フミをおこすだけが、せめてものでだてゞ、其さへ無事に、姫の手に届いて、見られてゐると言ふ、自信を持つ人は、一人としてなかつた。事実、大抵、女部屋の老女トジたちが、引つたくつて渡させなかつた。さうした文のとりつぎをする若人ワカウド——若女房——を呼びつけて、荒けなく叱つて居る事も、度々タビタビ見かけられた。

其方オモトは、この姫様こそ、藤原の氏神にお仕へ遊ばす、清らか

な常^{トコラトメ}処女と申すのだ、と言ふことを知らぬのかえ。神の咎めを憚るがえ。宮から恐れ多いお召しがあつてすら、ふつにおいらへを申しあげぬのも、それ故だとは考へつかぬげな。やきたい者。とつと、失せたがよい。そんな文とりついで手を、率^{イザ}川の一の瀬で浄めて来くさう。罰^{バチ}知らずが……。

こんな風に、わなりつけられた者は、併し、二人や三人ではなかつた。横佩家の女部屋に住んだり、通うたりしてゐる若人は、一人残らず一度は、経験したことだと謂つても、うそではなかつた。だが、郎女は、つひに一度そんな事のあつた様子も、知らされずに来た。

上つ方の郎^{イラツメ}女が、才^{ザエ}をお習ひ遊ばすと言ふことが御座りま

せうか。それは近代チカツヨ、ずっと下シモさまのをなごの致すこと、承ります。父君がどう仰オツシヤらうとも、父御様のお話は御一代テテゴ。お家の習しは、神さまの御意趣オムネ、とお思ひつかはされませ。氏の掟の前には、氏ウヂノカミ上ウヂノカミたる人の考へをすら、否みとほす事もある姥たちであつた。

其老女たちすら、郎女テンピンの天稟テンピンには、舌を捲きはじめて居た。

もう、自身たちの教へることもなうなつた。

かう思ひ出したのは、数年も前からである。内に居る、身狭乳母ムサノチオモ・桃花鳥野乳母ツキヌノママ・波田坂上刀自ハタノサカノヘノトジ、皆故知ユエシらぬ喜びの不安から、歎息し続けてゐた。時々伺ひに出る中臣志斐ナカトミノシヒノオムナ・三上水ミカミノミツ・凝刀ゴリノトジメ自女なども、来る毎、目を見合せて、ほうつとした顔をす

る。どうしよう、と相談するやうな人たちではない。皆無言で、自分等の力の及ばぬ所まで来た、姫の魂の成長にあきれて、目を見はるばかりなのだ。

才^{ザエ}を習ふと言ふなら、まだ聞きも知らぬこと、教へて賜れ^{タモ}。素直な郎女の求めも、姥たちにとつては、骨を刺しとほされるやうな痛さであつた。

何を仰せられます。以前から、何一つお教へなど申したことがおざりませうか。目下^{メシタ}の者が、目上のお方さまに、お教へ申すと言ふやうな考へは、神様がお聞き届けになりません。教へる者は目上、ならふ者は目下、と此^{コレ}が、神の代からの掟でおざります。

志斐^{オムナ}姫の負け色を救ふ為に、身狭^{ムサノチオモ}乳母も口^{サシハサ}を挿む。

唯知つた事を申し上げるだけ。其を聞きながら、御心がお育ち遊ばす。さう思うて、姥たちも、覚えたゞけの事は、郎女様のみ魂^{タマ}を揺る^{イブ}様にして、歌ひもし、語りもして参りました。教へたなど仰^{オツシヤ}つては私めらが、罰^{バチ}を蒙らねばなりません。

こんな事をくり返して居る間に、刀自たちにも、自分らの恃^{タシ}む知識^{チシキ}に対する、単純な自覚が出て来た。此は一層、郎女の望むまゝに、才^{ザエ}を習^{ナラハ}した方が、よいのではないか、と言ふ気が、段々して来たのである。

まことに其為には、ゆくりない事が、幾重にも重^{カサナ}つて起つた。姫の帳台の後から、遠くに居る父の心尽しだつたと見えて、二巻の

フシナデ
 女手の写経らしい物が出て来た。姫にとつては、肉縁はないが、
 ヒオホバ
 曾祖母にも当る橘夫人の法華経、又其御胎オハラにいらせられる――
 筋から申せば、大叔母御ゴにもお当り遊ばす、今の皇太后様の樂ガクキ
 毅論ロン。此二つの巻物が、美しい装ひで、棚を架カいた上に載せて
 あつた。

横佩大納言と謂はれた頃から、父は此二部を、自分の魂のやうに
 大事にして居た。ちよつと出る旅にも、大きやかな箱に納めて、
 一人分の資人トネリの荷として、持たせて行つたものである。其魂の書
 物を、姫の守りに留めておきながら、誰にも言はずにゐたのであ
 る。さすがに我強ガツヨい刀自たちも、此見覚えのある、美しい箱が出
 て来た時には、暫らく撲ウたれたやうに、顔を見合せて居た。さう

して後、^{ノチ}後で恥し^{アト}からうことも忘れて、皆声をあげて泣いたものであつた。

郎女は、父の心入れを聞いた。姥たちの見る目には、併し^{シカ}予期したやうな興奮は、認められなかつた。唯一途^{イチツ}に素直に、心の底の美しさが匂ひ出たやうに、静かな、美しい眼で、人々の感激する様子を、驚いたやうに見まはして居た。

其からは、此二つの女^{ヲシナデ}手の「本」^{ホン}を、一心に習ひとほした。偶^{ウチ}然は友を誘^ヒくものであつた。一月も立たぬ中の事である。早く、

此都に移つて居た飛鳥寺^{アスカテラ}—元興寺^{グワンコウジ}—から卷数^{クワンズ}が届けられた。

其には、難波^{ナニハ}にある帥の殿の立願^{リフグワン}によつて、仏前に読誦した

経文の名目が、書き列ねてあつた。其に添へて、一卷の縁起文が、

此御館へ届けられたのである。

父藤原豊成朝臣、亡父贈太政大臣七年の忌みに当る日に志を^{オコ}発して、書き綴つた「仏本伝来記」を、其後二年立つて、^{グワンコウジ}元興寺へ納めた。飛鳥以来、藤原氏とも関係の深かつた寺なり、本尊なのである。あらゆる念願と、報謝の心を籠めたもの、と言ふことは察せられる。其一卷が、^{ワケ}どう言ふ訣か、二十年もたつてゆくりなく、横佩家へ戻つて来たのである。

郎女の手には、此巻が渡つた時、姫は端近く^{オザ}膝行り出て、元興寺の方を礼拝した。其後で、

難波とやらは、どちらに当るかえ。

と尋ねて、示す方角へ、活きくした顔を向けた。其目からは、

珠数の珠の水スキシヤウ精のやうな涙が、こぼれ出てゐた。

其からと言ふものは、来る日もくる日も、此元興寺の縁起文を手
 写した。内典・外典其上に又、大日本オホヤマトびとなる父の書いた文。モン

指から腕、腕から胸、胸から又心へ、沁み／＼と深く、魂を育
 てる智慧チエの這入つて行くのを、覚えたのである。

大日本オホヤマトヒタカミ日高見の国。国々に伝はるありとある歌ウタ諺コトワザ、又其旧ソノモト

辞ツゴト。第一には、中臣の氏の神語り。藤原の家の古物語り。多く

の語り詞を、絶えては考へ継ぐ如く、語り進んでは途切れ勝ちに、
ノロノロ呪々しく、くねくねしく、独り語りする語部や、乳母オモや、嚼母ママ

たちの唱へる詞が、今更めいて、寂しく胸に蘇つて来る。

を、あれだけの習しを覚える、たゞ其だけで、此世に生き

ながらへて行かねばならぬみづからであつた。

父に感謝し、次には、尊いオホラバ大叔母君、其から見ぬ世の曾祖母オホオバの尊に、何とお礼申してよいか、量り知れぬものが、心にたぐり上げて来る。だがまづ、父よりも誰よりも、御礼申すべきは、み仏である。この珍貴ウツサトリの感覚を授け給ふ、限り知られぬ愛メゲみに充ちたよき人が、此世界の外に、居られたのである。郎女は、塗香ツカウをとり寄せて、まづ髪に塗り、手に塗り、衣を薰るばかりに匂はした。

十一

ほゝき ほゝきい ほゝほきい——。

きのふよりも、澄んだよい日になつた。春にしては、驚くばかり濃い日光が、地上にかつきりと、木草の影を落して居た。ほか／＼した日よりなのに、其を見てみると、どこか、薄ら寒く感じるほどである。時々過ぎる雲の翳りもなく、晴れきつた空だ。高原を拓いて、間引いた疎らな木原の上には、もう沢山の羽虫が出て、のぼつたり降つたりして居る。たつた一羽の鶯が、よほど前から一処を移らずに、鳴き続けてゐるのだ。

家の刀自たちが、物語る口癖を、さつきから思ひ出して居た。出雲宿禰の分れの家の嬢子が、多くの男の言ひ寄るのを煩しがつて、身をよけ／＼して、何時か、山の林の中に分け入つた。さう

して其^{ソコ}処で、まどろんで居る中に、悠^{ウラウラ}々と長い春の日も、暮れ
てしまつた。嬢子は、家路と思ふ^{ミチ}徑を、あちこち歩いて見た。脚
は茨^{イバラトゲ}の棘にさゝれ、袖は、木の楚^{ズハエ}にひき裂かれた。さうしてとう
く、里らしい家^{イヘムラ}群の見える小高い岡の上に出た時は、裳も、
著物も、肌の出るほど、ちぎれて居た。空には、夕月が光りを増
して来てゐる。嬢子はさくり上げて来る感情を、声に出した。

ほゝき ほゝきい。

何時^{イツ}も、悲しい時に泣きあげて居た、あの声ではなかつた。「をゝ
此身は」と思つた時に、自分の顔に触れた袖は袖ではないもので
あつた。枯^カれ原の冬草の、山肌色をした小^{チヒサ}な翼であつた。思ひが
けない声を、尚^{ナホ}も出し続けようとする口を、押へようすると、

自身すらいとほしんで居た柔らかな唇は、どこかへ行つてしまつて、替りに、さゝやかな管のやうな喙クチバシが来てついて居る——。悲しいのか、せつないのか、何の考へさへもつかかなかつた。唯、身ミ悶モダえをした。するとふはりと、からだは宙に浮き上つた。留めようと、袖をふれば振るほど、身は次第に、高く翔カケり昇つて行く。五日月の照る空まで……。その後ゴ、今の世までも、

ほゝき ほゝきい ほゝほきい。

と鳴いてゐるのだ、と幼い耳に染シみつけられた、物語りの出雲の嬢子が、そのまゝ、自分であるやうな気がして来る。

郎女は、徐シツかに両袖モロソデを、胸のあたりに重ねて見た。家に居た時よりは、褻ナれ、皺シワ立つてゐるが、小鳥の羽ハネには、なつて居なかつ

た。手をあげて唇に触れて見ると、喙クチバシでもなかつた。やつぱり、ほつとりとした感触を、指の腹に覺えた。

ほゝき鳥ドリ—鶯—になつて居た方がよかつた。昔ムカシ語カタりの嬢子は、

男を避けて、山の楚シモトハラ原へ入り込んだ。さうして、飛ぶ鳥にな

つた。この身は、何とも知れぬ人の倂ヒにあくがれ出て、鳥にもならず、こゝにかうして居る。せめて蝶テフトリ飛虫トリにでもなれば、ひらくと空に舞ひのぼつて、あの山の頂へ、倂ヒびとをつきとめに行かうもの——。

ほゝき ほゝきい。

自身の咽喉ノドから出た声だ、と思つた。だがやはり、廬の外で鳴くのであつた。

郎女の心に動き初めた叡い光りは、消えなかつた。今まで手習ひした書卷の何処かに、どうやら、法喜と言ふ字のあつた気がする。法喜——飛ぶ鳥すらも、美しいみ仏の詞に、感けて鳴くのではなからうか。さう思へば、この鶯も、

ほゝき ほゝきい。

嬉しさうな高音を、段々張つて来る。

物語りする刀自たちの話でなく、若人らの言ふことは、時たま、世の中の瑞々しい消息を伝えて来た。奈良の家の女部屋は、裏方五つ間を通した、広いものであつた。郎女の帳台の立ち処を一番奥にして、四つの間に、刀自・若人、凡三十人も居た。若人等は、この頃、氏々の御館ですることだと言つて、苑の池の蓮の

茎を切つて来ては、藕糸ハスイトを引く工夫に、一心になつて居た。横佩家の池の面を埋めるほど、珠を捲いたり、解けたりした蓮の葉は、まばらになつて、水の反射が蔀シトミを越して、女部屋まで来るばかりになつた。茎を折つては、纖維を引き出し、其片糸を幾筋も合せては、糸に縊ヨる。

郎女は、女たちの凝つてゐる手芸を、ぢつと見て居る日もあつた。ほうくと切れてしまふ藕糸ハスイトを、八合コ・十二合コ・二十合ハタコに縊ヨつて、根気よく、細い綱の様にする。其を績ウみ麻ヲの麻ヲごけに繋ギぎためて行く。奈良の御館ミタチでも、蚕カフコは飼つて居た。實際、刀自たちは、夏は殊にせはしく、そのせゐで、不機嫌フキゲンになつて居る日が多かつた。

刀自たちは、初めは、そんな韓カラの技人テビトのするやうな事は、と目もくれなかつた。だが時が立つと、段々興味を惹かれる様子が見えて来た。

こりや、おもしろい。絹の糸と、績ウみ麻ヲとの間を行く様な妙な糸の——。此で、切れさへしなればなう。

かうして績ツムぎ蓄タめた藕糸は、皆一纏めにして、寺々に納めようと、言ふのである。寺には、其ソレ々の技女ギヂヨが居て、其糸で、唐土モロコシヤウ様と言ふよりも、天竺風な織物に織りあげる、と言ふ評判であつた。女たちは、唯功徳クドクの為に糸ツムを績ツムいでゐる。其でも、其が幾かせ、幾たまと言ふ風に貯つて来ると、言ひ知れぬ愛著を覚えて居た。だが、其がほんとは、どんな織物になることやら、其処ソコまでは想

像も出来なかつた。

若人たちは莖を折つては、巧みに糸を引き切らぬやうに、長く／＼と抽^ヒき出す。又其^{ソノ}、粘り気の少いさくいものを、まるで絹糸を縫り合せるやうに、手際よく糸にする間も、ちつとでも口やめる事なく、うき世語りなどをして居た。此は勿^{モチ}論^{ロン}、貴族の家庭では、出来ぬ掟になつて居た。なつては居ても、物珍^{モノメ}でする盛りの若人たちには、口を塞いで緘^シ黙^ジ行^マを守ることは、死ぬよりもつらい行^{ギヤウ}であつた。刀自らの油断を見ては、ぼつ／＼話をしてゐる。其きれ／＼が、聞かうとも思はぬ郎女の耳にも、ぼつ／＼^は這入^いつて来^キ勝ちなのであつた。

鶯の鳴く声は、あれで、
法^{ホケ}華^{キヤウ}経^{ヤウ}々々々と言ふのぢやて——。

ほゝ、どうして、え——。

天竺のみ仏は、をなごは、助からぬものぢやと、説かれくして来たがえ、其果てに、女でも救ふ道が開かれた。其を説いたのが、法華経ぢやと言ふげな。

——こんなこと、をなごの身で言ふと、さかしがりよと思はうけれど、でも、世間では、さう言ふもの——。

ぢやで、法華経々々々と経の名を唱へるだけで、この世からして、あの世界の苦しみが、助かるといの。

ほんまにその、天竺のをなごが、あの鳥に化^ナり變つて、み経の名を呼ばゝるのかえ。

郎女には、いつか小耳に挿んだ其話が、その後、何時^{イツ}までも消え

て行かなかつた。その頃ちようど、シヨウサンジャウドブツセフジユギヤウ称讚浄土仏撰受経を、千部写さうとの願をオコ発して居た時であつた。其が、はかどらぬ。何時までも進まぬ。茫バウとした耳に、此世ヨバナシフタタビ話が再また、紛れ入つて来たのであつた。

ふつと、こんな気がした。

ほゝき鳥は、先の世で、御オンキヤウ経手写の願を立てながら、え

果ハタさいで、死にでもした、いとしい女子がなつたのではな

らうか。……さう思へば、若モしや今、千部に満たずにしまふ

やうなことがあつたら、我が魂タマは何になることやら。やつぱ

り、鳥か、虫にでも生れて、切セツなく鳴き続けることであらう。

つひに一度、ものを考へた事もないのが、此国のあて人の娘であ

つた。磨^{ミガ}かれぬ智慧^{チエ}を抱いたまゝ、何も知らず思はずに、過ぎて行つた幾百年、幾万の貴い女^{ニヨシヤウ}性の間に、蓮^{ハチス}の花がほつちりと、蒼^{ツボミ}を擡^{モタ}げたやうに、物を考へることを知り初^ソめた郎女であつた。

をれよ。鶯^{ウグヒス}よ。あな姦^{カマ}や。人に、物思ひをつけくさる。

荒々しい声と一しよに、立つて、表戸と直角^{カネ}になつた草壁^{シトミ}の部戸^ドをつきあげたのは、当麻^{タギマ}語部の媼^{オムナ}である。北側に当るらしい其外側は、牕^{マド}を圧するばかり、篠竹が繁つて居た。沢山の葉筋^{ハスヂ}が、日をすかして一時にきら〜と、光つて見えた。

郎女は、暫らく幾本とも知れぬその光りの筋の、閃^{ヒラメ}き過ぎた色を、^{マブタ}暁の裏に、見つめて居た。をとゝひの日の入り方、山の端に見た輝きが、思はずには居られなかつたからである。

また一時、イツトキ 廬堂イホリダウを廻つて、音するものもなかつた。日は段々タ闌けて、小昼コヒルの温みヌクが、ほの暗い郎女の居処にも、ほつとりと感じられて来た。

寺ヤツコの奴が、三四人先に立つて、僧綱ソウガウが五六人、其に、大勢シの所ヨケ化たちのとり捲いた一群れが、廬へ来た。

これが、フル古山田寺だ、と申します。
勿モツタイ体ぶつた、しわがれ声が聞えて来た。

そんな事は、どうでも——。まづ、郎女イラツメさまを——。

噛みつくやうにあせつて居る家長イヘオトナ老ヌカタバノコフル額田部子古ヌカタバノコフルのかなり声イヘオトナがした。

同時に、表戸は引き剥がされ、其に隣つた、幾つかのタツゴモ豎薦タツゴモをひ

きちぎる音がした。

づうと這ハひ寄つて来た身狭乳母ムサノチオモは、郎女の前に居たけを聳ソビヤかして、掩オホひになつた。外光の直射を防ぐ為と、一つは、男たちの前、殊トモには、庶民の目に、貴人アテビトの姿を暴サラすまい、とするのであらう。伴トモに立つて来た家人ケニンの一人が、大きな木の叉マタブリ枝をへし折つて来た。さうして、旅用意の巻帛マキギヌを、幾垂れか、其場で之コレに結び下げた。其を牀ユカにつきさして、即座の豎帷タツバリ——几帳——は調つた。乳母オモは、其前に座を占めたまゝ、何時までも動かなかつた。

怒りの滝のやうになつた額田部子古は、奈良に還つて、公に訴へると言ひ出した。大和国にも断つて、寺の奴ばらを追ひ払つて貰ふとまで、いきまいた。大師を頭に、横佩家に深い筋合ひのある貴族たちの名をあげて、其方々からも、何分の御吟味を願はずには置かぬ、と凄い顔をして、住侶たちを脅かした。

郎女は、貴族の姫で入らせられようが、寺の淨域を穢し、結界まで破られたからは、直にお還りになるやうには計はれぬ。寺の四至の境に在る所で、長期の物忌みして、その贖ひはして貰はねばならぬ、と寺方も、言ひ分はひつこめなかつた。

理分にも非分にも、これまで、南家の権勢でつき通して来た家長

ナ老等にも、寺方の扱ひと言ふものゝ、世間どほりにはいかぬ事が
 ワカ訣つて居た。乳母オモに相談かけても、一代さう言ふ世事アツカに与つた事
 のない此人は、そんな問題には、詮カヒない唯タダの女ニヨシヤウ性に過ぎなか
 つた。

サツキ先刻からまだ立ち去らずに居た当麻語部の嫗が、口を出した。

ソレ其は、寺方が、理分でおざるがや。お随ひなされねばならぬ。

其を聞くと、身狭乳母は、激しく、田舎語部キナカカタリベの老女を叱りつけ
 た。男たちに言ひつけて、畳にしがみつぎ、柱にかきスガ継フルババる古婆
 を掴ツカみ出させた。さうした威高さは、さすがオノツカに自ら備ツケつてゐた。

何事も、この身などの考へではきめられぬ。帥ソウの殿トに承ウケらう
 にも、国遠し。まづ姑シバし、郎女様のお心による外はないもの、

と思ひまする。

其より外には、方ハウもつかかなかつた。奈良の御館ミタチの人々と言つても、多くは、此人たちの意見を聴いてする人々である。よい思案を、考へつきさうなものも居ない。難波へは、直スゲ様サマ、使ひを立てることにして、とにもかくにも、当座は、姫の考へに任せよう、と言ふことになつた。

郎女様。如何イカガお考へ遊ばしまする。おして、奈良へ還れぬでも御座りませぬ。モツトモ尤、寺方でも、候サブラヒビト人ヤツコや、奴隸ヤツコの人数を揃へて、妨げませう。併シカし、御館ミタチのお勢ひには、何程の事でも御座りませぬ。では御座りまするが、お前さまのお考へを承らずには、何とも計ひかねまする。御思案お洩し遊ばされ。

謂はゞ、難題である。あて人の娘御に、出来よう筈のない返答である。乳母も、子古も、凡は無駄な伺ひだ、と思つては居た。ところが、郎女の答へは、木魂返しの様に、躊躇ふことなしにあつた。其上、此ほどはつきりとした答へはない、と思はれる位、凜としてゐた。其が、すべての者の不満を圧倒した。

姫の咎は、^{トガ} 姫が贖ふ。^{アガナ} 此寺、此二上山の下に居て、身の償ひ、心の償ひした、と姫が得心するまでは、還るものとは思やる^{オモ}な。

郎女の声・詞を聞かぬ日はない身狭乳母ではあつた。だがつひしか此ほどに、頭の髓まで沁み入るやうな、さえ／＼とした語を聞いたことのない、乳母^{チオモ}だつた。

寺方の言ひ分に譲るなど言ふ問題は、小さい事であつた。此爽サワやかな育ての君の判断力と、惑ひなき詞に感じてしまつた。たゞ、涙かうまで賢サカしい魂を窺ウカガひ得て、頬に伝ふものを拭ふことも出来なかつた。子古にも、郎女の詞を伝達した。さうして、自分のまだ曾て覚えたことのない感激を、力深くつけ添へて聞かした。

ともあれ此上は、難波津ナニハツへ。

難波へと言つた自分の語に、氣づけられたやうに、子古は思ひ出した。今日か明日、新羅問罪シラギの為、筑前へ下る官使の一行があつた。難波に留つてゐる帥の殿も、次第によつては、再フタタビ太宰府へ出向かれることになつてゐるかも知れぬ。手遅れしては一大事である。此足ですぐ、北へ廻つて、大阪越えから河内へ出て、難波ま

で、馬の叶^{カネ}ふ処は馬で走らう、と決心した。

万法蔵院に、唯一つ飼つて居た馬の借用を申し入れると、此は快く聴き入れてくれた。今日の日暮れまでには、立ち還りに、難波へ行つて来る、と齒のすいた口に叫びながら、郎女の豎^{タツバリ}帷に向けて、庭から匍^{ホフク}伏した。

子古の発つた後は、又のどかな春の日に戻つた。悠^{ウラウラ}々と照り暮す山々を見せませう、と乳母が言ひ出した。木立ち・山陰から盗み見する者のないやうに、家人^{ケニン}らを、一町・二町先まで見張りに出して、郎女を、外に誘ひ出した。

暴風雨^{アラシ}の夜、添^{ソフノシモ}下・広瀬・葛城の野山を、かちあるきした娘御ではなかつた。乳母と今一人、若人の肩に手を置きながら、歩

み出た。

日の光りは、霞みもせず、陽カゲ炎ロフも立たず、唯タダをどんで見えた。

昨日眺めた野も、斜になつた日を受けて、物の影が細長く靡いて居た。青垣の様にとりまく山々も、愈イヨ々イヨ遠く裾を曳いて見えた。早いスミレ堇―げんげ―が、もうちらほら咲いてゐる。遠く見ると、その赤々とした紫が一続きに見えて、夕焼け雲がおりて居るやうに思はれる。足もとに一本、おなじ花の咲いてゐるのを見つけた郎女は、膝クサムラを叢クサムラについて、ぢつと眺め入つた。

これはえ――。

すみれ、と申すとのこと御座ります。

かう言ふ風に、物を知らせるのが、あて人に仕へる人たちの、為シ

来りキタになつて居た。

蓮ハチスの花に似てゐながら、もつと細コマやかな、——絵にある仏の

花を見るやうな——。

ひとり言しながら、ぢつと見てゐるうちに、花は、広い萼ウテナの上に乗つた仏の前の大きな花になつて来る。其がまた、ふつと、目の前のさゝやかな花に戻る。

夕風ヒヤが冷ついて参ります。内へと遊ばされ。

乳母が言つた。見渡す山は、皆影濃くあざやかに見えて来た。

近々と、谷を隔てゝ、端山の林や、崖ナギの幾重も重つた上に、二フタカ上の男ヲノカミ嶽の頂が、赤い日に染つて立つてゐる。

今日は、又あまりに静かな夕ユフベである。山ものどかに、夕雲の中に

這入つて行かうとしてゐる。

まうしく。もう外に居る時では御座りません。

十三

「朝目よく」うるはしい兆シルシを見た昨日は、郎女にとつて、知らぬ経験を、後から後から展いて行つたことであつた。たゞ人の考ビトへから言へば、苦しい現実のひき続きではあつたのだが、姫にとつては、心驚く事ばかりであつた。一つく變つた事に逢ふ度に、「何も知らぬ身であつた」と姫の心の底の聲が揚つた。さうして、

その事毎に、挨拶アイサツをしてはやり過したい気が、一ぱいであつた。今日も其続きを、くはしく見た。

なごり惜しく過ぎ行く現ウツし世のさま／＼。郎女は、今日を閉ぢ

て、心に一つく収めこまうとして居る。ほのかに通り行き、将ハタ

著しくはためき過ぎたもの――。宵闇ヨヒヤミの深くならぬ先に、廬イホリの

まはりは、すつかり手入れがせられて居た。灯台も大きなのを、

寺から借りて来て、煌クワウクワウ々と、油火アブラビが燃えて居る。明王像も、

女人のお出での場処には、すさまじいと言ふ者があつて、どこか

へ搬ハコんで行かれた。其よりも、郎女の為には、帳台シツラの設備はれて

ゐる安らかさ。今宵は、夜も、暖かであつた。帷帳トバリを周メケらした中

は、ほの暗かつた。其でも、山の鬼神モノ、野の魍魎モノを避ける為の灯

の渦が、ぼうと梁ハリに張り渡した頂ツシイタ板イタに揺ユラめいて居るのが、たの
 もしい氣を深めた。帳台のまはりには、乳母や、若人が寝たらし
 い。其ももう、一時ヒトトキも前の事で、皆すやくと寢息の音を立て、
 居る。姫の心は、今は軽かつた。

たとへば、佛に見たお人には逢はずとも、その佛を見た山の麓に
 来て、かう安らかに身を横ヨコタへて居る。

灯台の明りは、郎女の額の上に、高く臙ろに見える光りの輪を作
 つて居た。月のやうに円マルくて、幾つも上へくと、月グワチリン輪リンの重
 つてゐる如くも見えた。其が、隙間風スキマカゼの為であらう。時々薄れ
 て行くと、一つの月になつた。ぼうつと明り立つと、幾重にも隈
 の畳マドまつた、大きな円マドかな光明になる。

幸福に充ちて、忘れて居た姫の耳に、今宵も谷の響きが聞え出した。更けた夜空には、今頃やつと、遅い月が出たことであらう。物の音。——つた つたと来て、ふうと佇ち止るけはひ。耳をすますと、元の寂かな夜に、——激ち降る谷のとよみ。

つた つた つた。

又、ひたと止む。

この狭い廬の中を、何時まで歩く、蹠音だらう。

つた。

郎女は刹那、思ひ出して帳台の中で、身を固くした。次にわぢ／＼と戦きが出て来た。

天若御子——。

ようべ、タギマノカタリノオムナ 当麻語部 姫キカの聞いた物語り。あゝ其お方の、来て
窺ふ夜なのか。

——青馬の 耳面ミミモノトジ刀自。

刀自もがも。女弟オトもがも。

その子の はらからの子の

処女子ヲトメゴの 一人

一人だに わが配偶ツママにコ来よ

まことに畏オソロしいと言ふことを覚えぬ郎女にしては、初めてまぎ／＼と、オサ圧へられるやうな畏コハさを知つた。あゝあの歌が、胸に生カヘき蘇つて来る。忘れたい歌の文句が、はつきりと意味を持つて、

姫の唱へぬ口の詞から、胸にとほつて響く。乳房ホトバシから迸り出よう

とするとときめき。

帷帳トバリがふはと、風を含んだ様に皺シワだむ。

ついと、凍る様な冷氣——。

郎女は目を瞑ツプつた。だが——瞬間マツゲの間から映ウツつた細い白い指、まるで骨のやうな——帷帳トバリを掴んだ片手の白く光る指。

なも 阿弥陀ほとけ。あなたふと 阿弥陀ほとけ。

何の反省もなく、唇を洩れた詞。この時、姫の心は、急に寛クツロぎを感じた。さつと——汗。全身に流れる冷さを覚えた。畏コハい感情を持スゲつたことのないあて人の姫は、直スゲに動顛した心を、とり直すことが出来た。

なうく。あみだほとけ……。

今一度口に出して見た。をとゝひまで、手写しとほした、称讚シヨウサ
ンジャウドキヤウ 浄土經モンの文が胸に浮ぶ。郎女は、昨日までは一度も、寺道場
を覗ノゾいたこともなかつた。父君は家の内に道場を構へて居たが、
簾越チヤウモンしにも聴聞オンキヤウは許されなかつた。御經モンの文は手写して
も、固モトより意趣は、よく訣ワカらなかつた。だが、処々には、かつ／＼
＼氣持ちの汲みとれる所があつたのであらう。さすがに、まさ
かこんな時、突嗟トツサに口に上らう、とは思うて居なかつた。
白い骨、譬タトへば白玉の並んだ骨の指、其イッが何時までも目に残つて
居た。帷帳トバリは、元のまゝに垂れて居る。だが、白玉の指ばかりは
細々と、其カラに絡んであるやうな気がする。
悲しさとも、懐しみとも知れぬ心に、深く、郎女は沈んで行つた。

山の端に立つた俤びとは、白々とした掌をあげて、姫をさし招いたと覚えた。だが今、近々と見る其手は、海の渚の白玉のやうに、からびて寂しく、目にうつる。

長い渚を歩いて行く。郎女の髪は、左から右から吹く風に、あちらへ靡き、こちらへ乱れする。浪はたゞ、足もとに寄せてゐる。

渚と思うたのは、海の中道である。浪は、両方から打つて来る。どこまでもく、海の道は続く。郎女の足は、砂を踏んでゐる。

その砂すらも、段々水に掩はれて来る。砂を踏む。踏むと思うて居る中に、ふと其が、白々とした照る玉だ、と気がつく。姫は身を屈めて、白玉を拾ふ。拾うてもく、玉は皆、掌に置くと、粉

の如く碎けて、吹きつける風に散る。其でも、玉を拾ひ続ける。

玉は水隠れて、見えぬ様になつて行く。姫は悲しさに、もろ手を

以て掬はうとする。掬んでもく、水のやうに、手股から流れ

去る白玉——。玉が再、砂の上につぶ／＼並んで見える。忙し

く拾はうとする姫の俯いた背を越して、流れる浪が、泡立つてと

ほる。

姫は——やつと、白玉を取りあげた。輝く、大きな玉。さう思う

た刹那、郎女の身は、大浪にうち仆される。浪に漂ふ身……衣も

なく、裳もない。抱き持った等身の白玉と一つに、水の上に照り

輝く現し身。

ずん／＼と、さがつて行く。水底に水漬く白玉なる郎女の身

は、やがて又、一幹ヒトモトの白い珊瑚サンゴの樹キである。脚を根、手を枝とした水底の木。頭に生ひ靡くのは、玉藻であつた。玉藻が、深海のうねりのまゝに、揺れて居る。やがて、水底にさし入る月の光り——。ほつと息をついた。

まるで、潜カツきする海女アマが二十尋・三十尋の水底ミナソコから浮ウツび上つて嘯ウツく様に、深い息の音で、自身明らかに目が覚めた。

あゝ夢だつた。当麻まで来た夜道の記憶は、まぎ／＼と残つて居るが、こんな苦しさは覚えなかつた。だがやつぱり、をとゝひの道の続きを辿タドつて居るらしい気がする。

水の面からさし入る月の光り、さう思つた時は、ずん／＼海面に浮き出て来た。さうして悉く、跡形もない夢だつた。唯、姫の

仰ぎ寝る頂板ツシイタに、あゝ、水にさし入つた月。そこに以前のまゝに、幾つカサも暈の畳まつた月輪の形が、揺めユラいて居る。

なうく　阿弥陀ほとけ……。

再、口に出た。光りの暈カサは、今は愈々明りを増して、輪と輪との境の隈クマ々グマしい処までも見え出した。黒ずんだり、薄暗く見えたりした隈が、次第に凝り初めて、明るい光明の中に、胸・肩・頭・髪、はつきりと形を現ゲンじた。白々と袒ヌいだ美しい肌。淨キヨく伏せたまみが、郎女の寝姿を見おろして居る。かの日の夕ヒユフベ、山の端ハに見た倂オヨびビと——。乳のあたりと、膝元オヨびビにある手——その指、白玉オヨびビの指。

姫は、起き直つた。天井の光りの輪が、元のまゝに、たゞホノ灰かに、

事もなく揺れて居た。

十四

貴人ウマビトはうま人どち、やつこは奴隷ヤツコどち、と言ふからの——。

何時イツ見ても、大師タイシは、微塵ミヂン曇りのない、円マドかな相好サウガウである。其ソレに、ふるまひのおほどかなこと。若くから氏ウヂノカミ上ウヂノカミで、数十家ケの一族や、日本国中数万の氏ウヂビト人から立てられて来た家持ヤカモチも、ぢつと対ムカうてゐると、その静かな威に、圧せられるやうな気がして来る。

言はしておくがよい。奴隷^{ヤツコ}たちは、とやかくと口さがないのが、其^{ソノシゴト}為事よ。此身とお身とは、おなじ貴人^{ウマビト}ぢや。おのづから、話も合はうと言ふもの。此身が、段々なり上ると、うま^{ノボ}までがおのづとやつこ心になり居つて、いや嫉むの、そねむの。

家持は、此が多聞^{タモンテン}天か、と心に問ひかけて居た。だがどうも、さうは思はれぬ。同じ、かたどつて作るなら、とつい聯想^ソが逸れて行く。八年前、越中国から歸つた当座の、世の中の豊かな騒ぎが、思ひ出された。あれからすぐ、大仏開眼^{カイゲン}供養が行はれたのであつた。其時、近々と仰ぎ奉つた尊容、八十種^{ハチジフシユガウ}好具足した、と謂はれる其相^{サウガウ}好が、誰やらに似てゐる、と感じた。其がその

時は、どうしても思ひ浮ばずにしまつた。その時の印象が、今びつたり、的にあてはまつて来たのである。

かうして対ひあつて居る主人の顔なり、姿なりが、其まゝあの盧^ル遮那^{サナ}ほとけの倂だ、と言つて、誰が否まう。

お身も、少し咄^{ハナ}したら、えゝではないか。官位^{カウブリ}はかうぶり。

昔ながらの氏は氏——。なあ、さう思はぬか。紫徵^{シヒチユウダイ}中台の、

兵部省のと、位づけるのは、うき世の事だは。家^{ウチ}に居る時だ

けは、やはり神代^{カミヨイライ}以来の氏^{ウヂノカミ}上^{ウヂノカミ}づきあひが、えゝ。

新しい唐の制度の模倣ばかりして、漢土^{モロコシ}の才^{ザエ}が、やまと心に入

り替つたと謂はれて居る此人が、こんな嬉しいことを言ふ。家持は、感謝したい気がした。理会者・同感者を、思ひまうけぬ処に

見つけ出した嬉しさだつたのである。

お身は、ソウギヨク宋玉や、ワウハウ王褒の書いた物を大分持つて居ると

言ふが、太宰府へ行つた時に、手に入れたのぢやな。あんな

若い年で、わせだつたのだなう。お身は——。お身の氏では、

コマロ古麻呂。身の家に近い者でも奈良麻呂。あれらは漢魏はお

ろか、今の唐の小説なども、ふり向きもせんから、言ふがひ

ない話ぢやは。

兵部大輔は、やつと話のつきほを捉へた。

お身さまのお話ぢやが、わしは、賦フの類には飽きました。ど

うもあれが、この四十面さげてもまだ、涙もろい歌や、詩の

出て来る元になつて居る——さうつく／＼思ひますぢやて。

ところで近頃は、方カタを換へて、張文成を拾ひ読みすることにしました。この方が、なんぼか――。

大きに、其は、身も賛成ぢや。ぢやが、お身がその年になつても、まだ二十代ハタチの若い心や、瑞々しい顔を持つて居るのは、宋玉のおかげぢやぞ。まだなか／＼隠れては歩き居ウる、と人の噂ぢやが、嘘ぢやなからう。身が保証する。おれなどは、張文成ばかり古くから読み過ぎて、早く精気の尽きてしまつた心持ちがする。――ぢやが全く、文成はえ／＼なう。あの仁ニンに会うて来た者の話では、猪ブノコゴ肥えのした、唯モロコシの漢土モロコシびとぢやつたげなが、心はまるで、やまとのものと、一つと思ふが、お身なら、諾ウベナうてくれるだらうの。

文成に限る事ではおざらぬが、あちらの物は、読んで居て、知らぬ事ばかり教へられるやうで、時々ふつと思ひ返すと、こんな思はざつた考へを、いつの間にか、持つてゐる——そんな空恐しい気さへすることが、あります。お身さまにも、そんな^{オホエ}経験は、おありでがな。

大ありおほ有り。毎日々々、其よ。しまひに、どうなるのぢや。こんなに智慧づいては、と思はれてならぬことが——。ぢやが、女^{ヲミナゴ}子だけには、まづ当分、女部屋のほの暗い中で、こんな智慧づかぬ、のどかな心で居させたいものぢや。第一其が、われ／＼男の為ぢやて。

家持は、此了解に富んだ貴人に向つては、何でも言つてよい、青

年のやうな気が湧いて来た。

さやうく。智慧を持ち初めては、あの鬱イブセい女部屋には、ぢつとして居ませぬげな。第一、横佩ヨコハキカキツ墻内の――

此はいけぬ、と思つた。同時に、此臆オクれた氣の出るのが、自分を卑ヒクくし、大伴氏を、昔の位置から自ら蹶落ケオトす心なのだ、と感じる。

好エエ、好エエ。遠慮はやめやめ。氏上づきあひぢやもの。ほい又出た。おれはまだ、藤原の氏上に任せられた訣ワケぢやあ、なかつたつけの。

瞬間、暗い顔をしたが、直スゲにさつと眉マユの間から、輝きが出て来た。身の女姪メヒが神隠しにあうたあの話か。お身は、あの謎見たいないきさつを、さう解トるかね。ふん。いやおもしろい。女姪

の姫も、定めて喜ぶぢやらう。実はこれまで、内々消息を遣ツカハして、小あたりにあたつて見た、と言ふ口かね、お身も。大きに。

今度は軽い心持ちが、大胆に押勝の話を受けとめた。

お身さまが経験タメシずみぢやで、其で、郎女の才高ザエダカさと、男エラ扱ヒびヒすることが決りますな——。

此は——。額ヒタヒさまに切りつけるぞ——。免ユルせくとヒ言ふところぢやが、——あれはの、生れだちから違ふものな。藤原の氏姫ぢやからの。枚岡ヒララカの齋イツ姫ヒメにあがる宿世スクセを持つて生れた者ゆゑ、人間の男は、弾ハジく、弾く、弾きとばす。近よるまいぞよ。はゝはゝ。

大師は、笑ひをびたりと止めて、家持の顔を見ながら、きまじめな表情になつた。

ぢやがどうも——。聴き及んでのことゝ思ふが、家出の前まで、阿弥陀経の千部写経をして居たと言ふし、楽毅論から、兄の殿の書いた元興寺縁起も、其前に手習ひしたらしいし、まだまだ孝経などは、これぼつちの頃に習うた、と言ふし、なか／＼の女博士フナゴハカセでの。楚辞ソジや、小説にうき身をやつす身カイコボチフナゴや、お身は近よれぬはなう。霜月・師走の垣カク毀雪女フミナゴぢやもの。——どうして、其だけの女子が、神隠しなどに逢はうかい。

第一、場処が、あの当麻で見つかつたと言ひますからの——。

併し其は、藤原に全く縁のない処でもない。天二上は、中ナカト
 臣ミノ壽詞ヨゴトにもあるし……。齋イツ姫ヒメもいや、人の妻と呼ばれ

るのもいや——で、尼になる気を起したのでないか、と考へると、もう不安で不安でなう。のどかな気持ちばかりでも居られぬて——。

押勝の眉は集つて来て、皺シワ一つよせぬ美しい、この老い見えぬ貴人の顔も、思ひなし、ひずんで見えた。

何しろ、嬬タワヤメ女は国の宝ぢやでなう。出来ることなら、人の物にはせず、神の物にしておきたいところぢやが、——人間の高望タカノゾみは、さうばかりもさせてはおきをらぬがい——。ともかく、むぎ／＼尼寺へやる訣にはいかぬ。

ぢやが、お身さま。一人出家すれば、と云ふ詞が、この頃はやりになつて居りますが…。

九族が天に生じて、何になるといふのぢや。宝は何百人かゝつても、作り出せるものではないぞよ。どだい兄公殿が、少し仏凝りが過ぎるでなう——。自然内うらまで、そんな氣風がしみこむやうになつたかも知れぬぞ——。時に、お身のみ館の郎女も、そんな育てはしてあるまいな。其では、家の久須麻呂が泣きを見るからの。

人の悪いからかひ笑みを浮べて、話を無理にでも脇へ釣り出さうと努めるのは、考へるのも切ない胸の中が察せられる。

兄公殿アニキドノは氏上に、身は氏助ウヂノスケと言ふ訣なのぢやが、肝腎

齋き姫で、枚岡に居させられる叔母御は、もうよい年ぢや。

去年春日祭りに、女使ひで上られた姿を見て、神さびたものよ、と思うたぞ。今一代此方から進ぜなかつたら、齋き姫になる娘の多い北家の方が、すぐに取つて替つて、氏上に据るは。

兵部大輔にとつても、此はもう、他事ではなかつた。おなじ大伴幾流の中から、四代続いて氏上職を持ち堪へたのも、第一は宮廷の御恩徳もあるが、世の中によせが重かつたからである。其には、一番大事な条件として、美しい齋き姫が、後から後と此家に出で、とぎれることがなかつた為でもある。大伴の家のは、表向き堀どりさへして居ねば、子があつても、齋き姫は勤まる、と言

ふ定めであつた。今の阪上郎女は、二人の女子ヲミナゴを持つて、やはり齋イツキ姫である。此は、うつかり出来ない。此方コチラも藤原同様、叔母御が齋姫で、まだそんな年でない、と思つてゐるが、又どんなことで、他流の氏姫が、後を襲ふことにならぬとも限らぬ。大伴・佐伯サヘキの数知れぬ家々・人々が、外の大伴へ、頭をさげるやうになつてはならぬ。かう考へて来た家持の心の動揺などには、思ひよりもせぬ風で、

こんな話は、よそほかの氏上に言ふべきことでないが、兄アニキ公ドノ殿があゝして、此先何年、難波にゐても、太宰府に居ると言ふが表面オモテだから、氏の祭りは、枚岡・春日と、二処に二度づゝ、其外、週マハり年には、時々鹿島・香取アツマチの東路のはて

にある旧社モトヤシロの祭りまで、此方で勤めねばならぬ。實際よ

そほかの氏上よりも、此方コチラの氏助ははたらいてゐるのだが、

——だから、自分で、氏上の気持ちになつたりする。——もう一層なつてしまふかな。お身はどう思ふ。こりや、答へる訣にも行くまい。氏上に押し直らうとしたところで、今の身の考へ一つを任せマさせるものはない。上様方に於かせられて、お叱りの御沙汰ゴサタを下しおかれぬ限りは——。

京中で、此恵美屋敷ほど、庭タシナを嗜んだ家はないと言ふ。門は、左京二条三坊に、北に向いて開いて居るが、主人家族の住ひは、南を広く空アけて、深々とした山齋ヤマが作つてある。其に入りこみの多い池メグを周らし、池の中の島も、飛鳥の宮風に造られて居た。東の

ナカカド、西の中み門^{ナカカド}まで備つて居る。どうかすると、庭と申さうより、寛^{クワンクワン}々とした空き地の広くおありになる宮よりは、もつと手入れが届いて居さうな気がする。

庭を立派にして住んだ、うま人たちの末々の様が、兵部大輔の胸に來た。瞬間、憂鬱な気持ちがかぶさつて來て、前にゐる大師の顔を見るのが、氣の毒な様に思はれる。

案じるなよ。庭が行き届き過ぎて居る、と思つて居るのだらう。

そんなことはないさ。庭はよくても、亡びた人ばかりはないさ。淡海公の御館はどうだ。どの筋でも引き継がずに、今に荒してはあるが、あの立派さは。それあの山部^{ヤマベ}の何とか言つた、地下^{チゲ}の召し人^{メビト}の歌よみが、おれの三十になつたばかりの

頃、「昔見し旧フルき堤は、年深み……年深み、池の渚に、水ミクサ草
 生ひにけり」とよんだ位だが、其後が、これ此コノヤウ様に、四流
 にも岐れて榮えてゐる。もつとあるぞ——。なに、庭などに
 よるものぢやないは。

恃タノむ所の深い此あて人は、庭の風景の、目立つた個処々々を指摘
 しながら、其ソノヨ抛る所を、日本ヤマト・漢モロコシ土ワタに涉つて説明した。
 長い廊を、数人の童ワラハが続いて来る。

日ヒずかします。お召しあがり下されませう。

改つて、簡単な饗応の挨拶をした。まらうどに、早く酒を献じな
 さい、と言つてゐる間に、美しい采女ウネメが、盃を額より高く捧げて
 出た。

を、それだけ受けて頂けばよい。舞ひぶりを一つ、見て貰ひなさい。

家持は、何を考へても、先を越す敏感な主人に対して、唯虚心で居るより外は、なかつた。

うねめは、大伴の氏上へは、まだくださらぬのだつたね。藤原では、存知でもあらうが、先例が早くからあつて、淡海公が、近江の宮から頂戴した故事で、頂く習慣になつて居ります。

時々、こんな畏まつたもの言ひもまじへる。兵部大輔は、自身の語づかひにも、シヨツチユウ初中終、シフシン氣扱ひをせねばならなかつた。

氏上もな、身が執心シフシンで、兄公殿を太宰府へ追ひまくつて、

後にすわらうとするのだ、と言ふ奴があるといの——。やつぱり「奴はやつこどち」ぢやの。さう思ふよ。時に女姪メヒの姫だが——。

さすがの聡明第一の大師も、酒の量は少かつた。其が、今日は幾分いけた、と見えて、話が循環して来た。家持は、一度はぐらかされた緒イトグチ口に、とりついた気で、

横佩ヨコハキカキツ牆内の郎女イラツメは、どうなるでせう。社・寺、それとも宮——。どちらへ向いても、神さびた一生。あつたら惜しいものでおありだ。

氣にするな。氣にするな。氣にしたとて、どう出来るものか。此は——もう、人間の手へは、戻らぬかも知れんぞ。

末は、独り言になつて居た。さうして、急に考へ深い目を凝^{コラ}した。池へ落した水音は、未^{ヒツジ}がさがると、寒々と聞えて来る。

早く、躑^{ツツジ}躑の照る時分になつてくれぬかなあ。一年中で、この庭の一番よい時が、待ちどほしいぞ。

大師藤原恵美押勝朝臣の声は、若々しい、純な欲望の外、何の響きもまじへて居なかつた。

十五

つた つた つた。

郎女は、^{ヒタスラ}一向、あの音の歩み寄つて来る畏しい夜更けを、待つやうになつた。をとゝひよりは昨日、昨日よりは今日といふ風に、^{ソノアシオト}其蹙音が間遠になつて行き、此頃はふつに音せぬやうになつた。その氷の山に^{ムカ}對うて居るやうな、骨の^{ウツ}疼く戦慄の快感、其が失せて行くのを^{オソ}虞れるやうに、姫は夜毎、鶏のうたひ出すまでは、^{ホトンド}殆、祈る心で待ち続けて居る。

絶望のまゝ、幾晩も仰ぎ寝たきりで、目は昼よりも^サ寤めて居た。其間に起る夜の間の現象には、一切心が留らなかつた。現にあれほど、郎女の心を有頂天に引き上げた^{ツシ}頂板の^{オモヒテ}面の光り輪にすら、^{アキシ}明盲ひのやうに、注意は惹かれなくなつた。こゝに來て、^ト疾くに、七日は過ぎ、十日・半月になつた。山も、野も、春のけしきが整

うて居た。野ノイバラ茨の花のやうだつた小桜が散り過ぎて、其に次ぐ

山桜が、谷から峰かけて、断続しながら咲いてゐるのも見える。

麦原ムギワは、驚くばかり伸び、里人の野ノシゴト為事に出た姿が、終日、その

あたりに動いてゐる。

都から来た人たちの中、何時イツまでこの山陰に、春を起き臥フすこと

か、と佗ワびる者が殖えて行つた。廬堂の近くに掘り立てた板屋に、

かう長びくとは思はなかつたし、まだどれだけ続くかも知れぬ此

生活に、家ある者は、妻子に会ふことばかりを考へた。親に養は

れる者は、家の父母の外にも、隠れた恋人を思ふ心が、切々とし

て来るのである。女たちは、かうした場合にも、平氣に近い感情

で居られる長い暮しの習ナラハしに馴れて、何かと為事を考へてはして

居る。女方の小屋は、男のとは別に、もつと廬に接して建てられて居た。

ムサノチオモ身狭乳母の思ひやりから、男たちの多くは、唯さへ小人数な奈良ミタチの御館の番に行け、と言つて還され、長老一人の外は、唯オトナ雑用ザフヨウをする童と、奴隸位しか残らなかつた。

オモ乳母や、若人たちも、薄々は帳台の中で夜を久しく起きてゐる、郎女の様子を感じ出して居た。でも、なぜさう夜深く溜め息ついたり、うなされたりするか、知る筈のない昔かたぎの女たちである。

やはり、郎女の魂タマがあくがれ出て、心が空しくなつて居るものと単純に考へて居る。ある女は、魂オコナヒごひの為に、山尋ねの咒術

をして見たらどうだらう、と言つた。

乳母は一口に言ひ消した。姫様、当麻に御安著なされた其夜、奈良の御館へ計はずに、私にした当麻真人タギマノマヒトの家人たちの山尋ねが、わるい結果を呼んだのだ。当麻語部とか謂つた蟲物マジモノ使ひのやうな婆が、出しやばつての差配が、こんな事を惹き起したのだ。

その節、山の峠タワの塚で起つた不思議は、噂になつて、この貴人ウマヒト一家の者にも、知れ渡つて居た。あらぬ者の魂を呼び出して、郎女様におつけ申しあげたに違ひない。もうく、軽はずみな咒術オコナヒは思ひとまることにしよう。かうして、魂タマの游離アクガれ出た処の近くにさへ居れば、やがては、元のお身になり戻り遊アソバされることだらう。こんな風に考へて、乳母は唯、氣長に気ながに、と女たちを

諭^{サト}しくした。

こんな事をして居る中に、早一月も過ぎて、桜の後、暫らく寂しかつた山に、躑躅^{ツツジ}が燃え立つた。足も行かれぬ崖の上や、巖の腹などに、一^{ヒトムラ}群々々咲いて居るのが、奥山の春は今だ、となつて居るやうである。

ある日は、山へくと、里の娘ばかりが上つて行くのを見た。^{オヨソ}凡数十人の若い女が、何処^{ドコ}で宿つたのか、其次の日、てんでに赤い山の花を髪にかざして、降りて来た。廬の庭から見あげた若女房の一人が、山の躑躅^{ツツジ}林^{バヤシ}が練つて降るやうだ、と声をあげた。

ぞよ／＼と廬の前を通る時、皆頭をさげて行つた。其中の二三人が、つくねんとして暮す若人たちの慰みに呼び入れられて、板

屋の端へ来た。当麻の田居も、今は苗代時である。やがては田植
ゑをする。其時は、見に出やしやれ。こんな身でも、其時はずん
と、をなごぶりが上るぞな、と笑ふ者もあつた。

こゝの田居の中で、植ゑ初めの田は、腰折れ田と言うて、都
までも聞えた物語りのある田ぢやげな。

若人たちは、又例のマジモノウバ蠱物姥の古語りであらう、とまぜ返す。と
もあれ、かうして、山ごもりに上つた娘だけに、今年の田の早サウ処
女トメが当ります。其しるしが此コレぢや、と大事さうに、頭の躑躅に触
れて見せた。

もつと変つた話を聞かせぬかえと誘はれて、身分に高下はあつて
も、同じ若い同士のことゝて、色々な田キナカバナシ舎咄ナシをして行つた。其

を後に乳母たちが聴いて、気にしたことがあつた。山ごもりして居ると、小屋の上の崖をどう／＼と踏みおりて来る者がある。ようべ、真夜中のことである。一様にうなされて、苦しい息をついてゐると、音はそのまゝ、真下へく、降つて行つた。がら／＼と、岩の崩える響き。——ちようど其が、此盧堂の真上の高処に当つて居た。こんな処に道はない筈ぢやが、と今朝起きぬけに見ると、案の定、赤岩の大崩崖。ようべの音は、音ばかりで、ちつとも痕は残つて居なかつた。

其で思ひ合せられるのは、此頃ちよくく、子から丑の間に、里から見えるこのあたりの峰の上に、光り物がしたり、時ならぬ一時、嵐の凄い唸りが、聞えたりする。今までつひに聞かぬこと。

里人は唯かう、恐れ謹しんで居る、とも言つた。

こんな話を残して行つた里の娘たちも、苗代田の畔に、めい／＼のかざしの躑躅花を挿^サして歸つた。其は昼のこと、田舎は田舎らしい閨^{ネヤ}の中に、今は寝ついたであらう。夜はひた更けに、更けて行く。

昼の恐れのならに、寝苦しがつて居た女たちも、おびえ疲れに寝入つてしまつた。頭上の崖で、寝鳥の鳴き声がした。郎女は、まどろんだとも思はぬ目を、ふつと開いた。続いて今ひと響き、びしとしたのは、鳥などの、翼ぐるめひき裂かれたらしい音である。だが其だけで、山は音どころか、生き物も絶えたやうに、虚しい空間の闇に、時間が立つて行つた。

郎女の額のヌカの上の天井の光の暈カサが、ほの／＼と白んで来る。明りの隈はあちこちに偏倚カタヨつて、光りを豎タテにくぎつて行く。と見る間に、ぱつと明るくなる。そこに大きな花。蒼白い堇。その花びらが、幾つにも分けて見せる隈、仏の花の青蓮華シヤウレンゲと言ふものであらうか。郎女の目には、何とも知れぬ浄らかな花が、車輪のやうに、宙にぱつと開いてゐる。仄暗い葦シベの処シベに、むらくと雲のやうに、動くものがある。黄金の葦シベをふりわけける。其は黄金の髪である。髪の中から匂ひ出た莊嚴な顔。閉ぢた目が、憂ひを持つて、見おろして居る。あゝ肩・胸・頸アヲはな肌。——冷え／＼とした白い肌。をゝおいとほしい。

郎女は、自身の声に、目が覚めた。夢から続いて、口は尚夢ナホのや

うに、語を逐オうて居た。

おいとほしい。お寒からうに――。

十六

山の躑躅ツツジの色は、様々ある。一つ色のものだけが、一時に咲き出して、一時に萎シボむ。さうして、凡オヨソ一月は、後から後から替つた色のが匂ひ出て、禿ハげた岩も、一冬のうら枯れをとり返さぬ柴木山も、若夏の青雲の下に、はでなかざしをつける。其間に、藤の短い花房が、白く又紫に垂れて、古い木の幹の高さを、せつなく、

寂しく見せる。下草に交つて、馬酔木アシビが雪のやうに咲いても、花
めいた心を、誰に起させることもなしに、過ぎるのがあはれであ
る。

もう此頃になると、山は厭イトはしいほど緑に埋れ、谷は深々と、繁
りに隠されてしまふ。郭クワツコウ公は早く鳴きカ噎らし、時鳥が替つて、
日も夜も鳴く。

草の花が、どつと怒濤ドタウの寄せるやうに咲き出して、山全体が花原
見たやうになつて行く。里の麦は刈り急がれ、田の原は一様に青
みわたつて、もうこんな伸びたか、と驚くほどになる。家の庭ソ
苑ノにも、立ち替り咲き替つて、栽カ木、草花が、何処ドコまで盛り続
けるかと思はれる。だが其も一盛りで、坪はひそまり返つたやう

な時が来る。池には葦が伸び、蒲が秀ホぎ、藺チが抽ヌキんで、来る。遅々として、併し忘れた頃に、俄かに伸ノし上るやうに育つのは、蓮の葉であつた。

前年から今年にかけて、海の彼方の新羅シラギの暴状が、目立つて棄スて置かれぬものに見えて来た。太宰府からは、軍船を新造して新羅征伐の設けをせよ、と言ふ命のお降しを、度々都へ請うておこして居た。此忙しい時に、偶然流人太宰員外帥として、難波に居た横佩ヨコハキケ家の豊成は、思ひがけぬ日々を送らねばならなかつた。

都の姫の事は、千古の口から聴いて知つたし、又、京・難波の間を往来する頻繁な公私の使ひに、文をことづてる事は易かつたけれども、どう処置してよいか、途方に昏クれた。ちよつと見は何で

もない事の様で、実は重大な、家の大事である。其だけに、常の優柔不断な心癖は、益々つのるばかりであつた。

寺々の知音に寄せて、当麻寺へ、よい様に命じてくれる様に、と書いてもやつた。又処置方について伺うた横佩墻内の家の長老・トネ刀自トジたちへは、ひたすら、汝等の主の郎女を護つて居れ、と言ふやうな、抽象風なことを、答へて来たりした。

次の消息には、何かと具体した仰せつけがあるだらう、と待つて居る間に、日が立ち、月が過ぎて行くばかりである。其間にも、姫の失はれたと見える魂が、お身に戻るか、其だけの望みで、人々は、山村に止つて居た。物思ひに、屈託ばかりもして居ぬ若人たちは、もう池のほとりにおり立つて、伸びた蓮の茎を切り集め

出した。其を見て居た寺の婢女メヤツコが、其はまだ若い、もう半月も

おかねばと言つて、寺領の一部に、蓮根ハスネを取る為に作つてあつた

蓮田ハチスダへ、案内しよう、と言ひ出した。

あて人の家自身が、それオホヤケ、農村の大家であつた。其が次第

に、官人ツカサビトらしい姿に更カハつて来ても、家庭の生活には、何時イツま

でたつても、何処ドコか農家らしい様子が、残つて居た。家構へにも、

屋敷の広場ニハにも、家の中の雑用具ザフヨウグにも。第一、女たちの生活は、

起居タチキふるまひなり、服装なりは、優雅に優雅にと變つては行つた

が、やはり昔の農家の家内ヤウチの匂ひがつき纏マトうて離れなかつた。刈

り上げの秋になると、夫と離れて暮す年頃に達した夫人などは、

よく其家の遠い田莊ナリドコロへ行つて、数日を過して来るやうな習し

も、絶えることなく、くり返されて居た。

だから、刀自たちは固^{モト}より若人らも、つくねんと女部屋の薄暗がりに、明し暮して居るのではなかつた。てんでに、自分の出た村方の手芸を覚えて居て、其を、仕へる君の為に為^{シイダ}出さう、と出精してはたらいた。

裳^モの襷^{ヒダ}を作るのに珍^ナい術^テを持つた女などが、何でもないことで、とりわけ重宝がられた。袖の先につける鱮^{ハタソデ}袖^デを美しく為^{シタ}立て、其に、珍しい縫ひとりをする女なども居た。こんなのは、どの家庭にもある話でなく、かう言ふ若人をおきあてた家は、一つの見^ミてくれを世間に持つ事になるのだ。一般に、染めや、裁ち縫ひが、家々の顔見合はぬ女どうしの競技のやうに、もてはやされ

た。摺^スり染めや、擣^ウち染めの技術も、女たちの間には、目立たぬ
進歩が年々にあつたが、浸^ヒで染めの為の染料が、韓^{カラ}の技^テ工^ビ人の影
響から、途方もなく変化した。紫と謂つても、茜^{アカネ}と謂つても皆、
昔の様な、染め漿^{シホ}の 処^{トリ} 置^{アツカヒ}はせなくなつた。さうして、染め上
りも、艶^{ツヤツヤ}々々しく、はでなものになつて来た。表向きは、かうし
た色の禁令が、次第に行きわたつて来たけれど、家の女部屋まで
は、官^{カミ}の目も届くはずはなかつた。

家庭の主婦が、居まはりの人を促したてゝ、自身も精励してする
やうな為事は、あて人の家では、刀^ト自^ジ等の受け持ちであつた。若
人たちも、田畠に出ぬと言ふばかりで、家の中での為事は、まだ
見^マ参^{キリ}をせず^{マミエ}にゐた田舎暮しの時分と、大差はなかつた。とり

わけ違ふのは、其家々の神々に仕へると言ふ、誇りはあるが、小むつかしい事がつけ加へられて居る位のことである。外出には、下人たちの見ぬ様に、笠を深々とかづき、其下には、更に薄^{ウスギヌ}帛^ヌを垂らして出かけた。

一^{イツトキ}時たゝぬ中に、婢^{メヤツコ}女ばかりでなく、自身たちも、田におりたつたと見えて、泥だらけになつて、若人たち十数人は戻つて来た。皆手に手に、張り切つて発育した、蓮の茎を抱へて、廬の前に並んだのには、常々くすりとも笑わぬ乳^{オモ}母たちさへ、腹の皮をよつて、切^{セツ}ながつた。

郎^{イラツメ}女^メ様。御^ゴ覧^{ラウ}じませ。

豎^{タツバリ}帳^リを手でのけて、姫に見せるだけが、やつとのことであつた。

ほう——。

何が笑ふべきものか、何が憎むに値するものか、一切知らぬ上^{ジヤウ}
 藤^{ラフ}には、唯常と変つた皆の姿が、羨^{ウラヤマ}しく思はれた。

この身も、その田居とやらにおり立ちたい——。

めつさうなこと、仰せられます。

めつさうな。きまつて、誇張した顔と口との表現で答へることも、
 此ごろ、この小社会で行はれ出した。何から何まで縛りつけるや
 うな、身狭^{ムサノチオモ}乳母に対する反感も、此ものまねで幾分、いり合せが
 つく様な気がするのであらう。

其日からもう、若人たちの糸^{イトヨ}縫りは初まつた。夜は、閨^{ネヤ}の闇^{ヤミ}の中
 で寝る女たちには、稀に男の声を聞くこともある、奈良の垣内^{カキツ}住

ひが、恋しかつた。朝になると又、何もかも忘れたやうになつて
 續み貯める。

さうした糸の、六かせ七かせを持つて出て、郎女に見せたのは、
 其数日後であつた。

乳母よ。この糸は、蝶鳥の翼よりも美しいが、蜘蛛の巣より
 弱く見えるがよ——。

郎女は、久しぶりでにつこりした。労を犒ふと共に、考への足ら
 ぬのを憐むやうである。

刀自は、驚いて姫の詞を堰き止めた。

なる程、此は脆過ぎまする。

女たちは、板屋に戻つても、長く、健やかな喜びを、皆して語つ

て居た。

全く些^{スゴ}しの悪意もまじへずに、言ひたいまゝの気持ちから、

田居とやらへおりたきたい――、

を反覆した。

刀自は、若人を呼び集めて、

もつと、きれぬ糸を作り出さねば、物はない。

と言つた。女たちの中の一人が、

それでは、刀自に、何ぞよい御思案が――。

さればの――。

昔を守ることばかりはいかついが、新しいことの考へは唯、
常^ネの婆の如く、愚かしかつた。
尋^{ヨソツ}

ゆくりない声が、郎女の口から洩れた。

この身の考へることが、出来ることか試して見や。

うま人を軽侮することを、神への忌みとして居た昔人である。だが、かすかな軽^{カル}しめに似た気持ち^カが、皆の心に動いた。

夏引きの麻生^{ヲフアサ}の麻を績^ウむやうに、そして、もつと日ざらしよく、細くこまやかに――。

郎女は、目に見えぬものゝさとしを、心の上で綴つて行くやうに、語を吐いた。

板屋の前には、俄かに、蓮の茎が乾^ホし並べられた。さうして其が乾^{カワ}くと、谷の澱みに持ち下りて浸す。浸しては晒^{サラ}し、晒しては水に漬^ヒでた幾日の後、筵^{ムシロ}の上で槌の音高く、こも／＼、交^{コモゴモ}々々と

叩き柔らげた。

その勤^{イッ}しみを、郎女も時には、端近くみざり出て見て居た。咎めようとしても、思ひつめたやうな目して、見入つて居る姫を見ると、刀自は口を開くことが出来なくなつた。

日晒しの莖を、八針^{ヤツハリ}に裂き、其を又、幾針にも裂く。郎女の物言はぬまなざしが、ぢつと若人たちの手もとをまもつて居る。果ては、刀自も言ひ出した。

私も、績^ウみませう。

績^ウみに績み、又績みに績んだ。藕^{ハスイト}糸のまるがせが、日にく殖えて、廬^{イホリダウ}堂の中に、次第に高く積まれて行つた。

もう今日は、みな月に入る日ぢやの——。

曆コロミの事を言はれて、刀自はぎよつとした。ほんに、今日こそ、氷ヒ室ムロの朔ツイタチ日ぢや。さう思ふ下から齒の根のあはぬやうな悪感を覺えた。大昔から、曆は聖ヒジリの与る道と考へて来た。其で、男女は唯、長老トネの言ふがまゝに、時の来又去つた事を教フシはつて、村や、家の行事を進めて行くばかりであつた。だから、教へぬに日月を語ることは、極めて聡サトい人の事として居た頃である。愈々魂をとり戻されたのか、と瞻マモりながら、はらくして居る乳母であつた。唯、郎女マタは復、秋分の日近づいて来て居ることを、心にと言ふよりは、身の内に、そく／＼と感じ初めて居たのである。蓮は、池のも、田居タケのも、極度に長タけて、苔ツボミの大きくふくらんだのも、見え出した。婢女メヤツコは、今が刈りしほだ、と教へたので、若人たちは、

皆手も足も泥にして、又田に立ち暮す日が続いた。

十七

彼岸中日 秋分の夕。朝曇り後晴れて、海のやうに深^{フカミドリ}碧^ナに風

いだ空に、昼過ぎて、白い雲が頻^{シキ}りにちぎれくに飛んだ。其が

門^{トワタ}渡る船と見えてゐる内に、暴風^{アラシ}である。空は愈々青澄み、昏^{クラ}く

なる頃には、藍の様に色濃くなつて行つた。見あげる山の端は、

横雲の空のやうに、茜^{アカネイロ}色^ロに輝いて居る。

大山嵐。木の葉も、枝も、顔に吹きつけられる程の物は、皆活き

て青かつた。板屋は吹きあげられさうに、煽^{アフ}りきしんだ。若人たちは、悉^{コトゴト}く郎女の廬に上つて、刀自を中に、心を一つにして、ひとしと顔を寄せた。たゞ互の顔の見えるばかりの緊張した気持ちの間に、刻々に移つて行く風。西から真^{マトモ}正面に吹きおろしたのが、暫らくして北の方から落ちて来た。やがて、風は山を離れて、平野の方から、山に向つてひた吹きに吹きつけた。峰の松原も、空^ソ野の方から、山に向つてひた吹きに吹きつけた。谷から峰^ヲラザマ様に枝を搔き上げられた様になつて、悲鳴を続けた。谷から峰^ヲの上に生え上^{ノボ}つて居る萱原は、一様に上へくと糶^セり昇るやうに、葉裏を返して扱^コき上げられた。

家の中は、もう暗くなつた。だがまだ見える庭先の明りは、黄にかつきりと、物の一つくを、鮮やかに見せて居た。

郎女様が――。

誰かの声である。皆、頭の毛が空へのぼる程、ぎよつとした。其が、何だと言はれずとも、すべての心が、一度に了解して居た。言ひ難い恐怖にかみづゝた女たちは、誰一人声を出す者も居なかつた。

身狭乳母は、今の今まで、姫の側に寄つて、後から姫を抱へて居たのである。皆の人のけはひで、覚め難い夢から覚めたやうに、目をみひらくと、あゝ、何時の間にか、姫はモロウデ 両腕 モロヒザ 両膝の間には、居させられぬ。一時に、慟哭するやうな感激が来た。だが長い訓練が、老女の心を取り戻した。凜リンとして、反り返る様な力が、湧き上つた。

誰ぞ、弓を——。鳴弦ぢや。

人を待つ間もなかつた。彼女自身、壁代に寄せかけて置いた白木の檀弓をとり上げて居た。

それ皆の衆——。反閉ぞ。もつと声高に——。あつし、

あつし、それ、あつしあつし……。

若人たちも、一人々々の心は、疾くに飛んで行つてしまつて居た。唯一つの声で、警※を発し、反閉した。

あつし あつし。

あつし あつし あつし。

狭い廬の中を踏んで廻つた。脇目からは、遶道する群れのやうに。

郎女様は、こちらに御座りますか。

万法蔵院の婢女メヤツコが、息をきらして走つて来て、何時イもなら、許されて居ぬ無作法で、近々と、廬ミギリの砌に立つて叫んだ。

なに——。

皆の口が、一つであつた。

郎女様か、と思はれるあて人が——、み寺の門カドに立つて居させると、つせるのを見たで、知らせにまゐりました。

今度は、乳母オモ一人の声が答へた。

なに、み寺の門に。

婢女を先に、行道の群れは、小石を飛トバす嵐アラシの中を、早足に練り出した。

あつし あつし あつし……。

声は、遠くからも聞えた。大風をつき抜く様な鋭声トゴエが、野面ノツラに伝はる。

万法蔵院は、実に寂セキとして居た。山風は物忘れした様に、鎮まつて居た。夕闇はそろく、かぶさつて来て居るのに、山裾のひらけた処を占めた寺庭は、白砂が、昼の明りに輝いてゐた。こゝからよく見える二上フタカミの頂は、広く、赤々と夕映えてゐる。

姫は、山田の道場の牕マドから仰ぐ空の狭さを悲しんでゐる間に、何時かこゝまで来て居たのである。浄域を穢ケガした物忌みにこもつてゐる身、と言ふことを忘れさせぬものが、其でも心の隅にあつたのであらう。門の闕シキミから、伸び上るやうにして、山の際ハの空を見

入つて居た。

暫らくおだやんで居た嵐が、又山に廻つたらしい。だが、寺は物

音もない黄昏だ。

男ヲノカミ嶽と女メノカミ嶽との間になだれをなした大きな曲線タワが、又次第に

両方へ聳ソノつて行つてゐる、此二つの峰の間アヒダの広い空際ソラギハ。薄れかゝ

つた茜アカネの雲が、急に輝き出して、白銀ハクギンの炎をあげて来る。山の

間マに充満して居た夕闇は、光りに照されて、紫だつて動きはじめた。

さうして暫らくは、外に動くものゝない明るさ。山の空は、唯白々として、照り出されて居た。

肌 肩 脇 胸 豊かな姿が、山の尾上ヲノヘの松原の上に現れた。併

し、梯に見つゞけた其顔ばかりは、ほの暗かつた。

今すこし著く^{シル} み姿顕したまへ——。

郎女の口よりも、皮膚をつんざいて、あげた叫びである。山腹の紫は、雲となつて鬚^{タナビ}ぎ、次第々々に降^{サガ}る様に見えた。

明るいのは、山際^{ヤマギハ}ばかりではなかつた。地上は、砂^{イサゴ}の数もよまれるほどである。

しづかに しづかに雲はおりて来る。万法蔵院の香殿・講堂・塔婆・楼閣・山門・僧房・庫裡^{クリコトゴト}、悉く金に、朱に、青に、昼^{イチジル}より著く見え、自ら光^{ミツカ}りを発して居た。

庭の砂の上にすれ〜に、雲は揺^{エウエイ}曳して、そこにあり〜と半身を顕した尊者の姿が、手にとる様に見えた。匂ひやかな笑みを

含んだ顔が、はじめて、まともに郎女に向けられた。伏し目に半ば閉ぢられた目は、此時、姫を認めたまうに、清しく見ひらいた。軽くつぐんだ唇は、この女性ニヨシヤウに向うて、物を告げてゞも居るやうに、ほぐれて見えた。

郎女は尊さに、目の低タれて来る思ひがした。だが、此時を過してはと思ふ一心で、御姿ミスガタから、目をそらさなかつた。

あて人を讃へるものと、思ひこんだあの詞が、又心から迸ホトバシり出た。

なも 阿弥陀ほとけ。あなたふと 阿弥陀ほとけ。

瞬間に明りが薄れて行つて、まのあたりに見える雲も、雲の上の尊者の姿も、ほの／＼と暗くなり、段々に高く、又高く上つて行く。

姫が、目送する間もない程であつた。忽タチマチ、二上山の山の端ハに溶け入るやうに消えて、まつくらな空ばかりの、たなびく夜になつて居た。

あつし あつし。

足を踏み、前サキを駆オふ声が、耳もとまで近づいて来てゐた。

十八

当麻の邑ムラは、此頃、一本の草、一ヒトクレ塊の石すら、光りを持つほど、賑ニギハひ充ちて居る。

タギマノマヒトケ
 当麻真人家の氏神 当麻彦タギマヒコの社へ、祭り時に外れた昨今、急に、
 氏上の拝礼があつた。故上総守老真人オユノ以来、暫らく絶えて居たこ
 とである。

其上、まう二三日に迫つた八月ハツキの朔日ツイタチには、奈良の宮から、勅
 使が来向はれる筈になつて居た。当麻氏から出られた大夫ダイフジンの
 お生み申された宮の御代に、あらたまることになつたからである。
 廬堂の中は、前よりは更に更になつて狭くなつて居た。郎女が、奈良の御館
 からとり寄せた高機タカハタを、設タてたからである。機織りに長けた女
 も、一人や二人は、若人の中に居た。此女らの動かして見せるフサ箒
 や梭ヒの扱ヒひ方を、姫はすぐに会得エトクした。機に上つて日ねもす、時
 には終ヨモスガラ夜織ヤオリつて見るけれど、蓮の糸は、すぐに円ツブになつたり、

断キれたりした。其でも、倦ウまずにさへ織つて居れば、何時イツか織りあがるもの、と信じてゐる様に、脇目からは見えた。

乳母は、人に見せた事のない憂はしげな顔を、此頃よくしてゐる。

何しろ、唐モロコシ土でも、天竺テンヂクから渡つた物より手に入らぬ、

といふ藕ハスイトオ糸織りを遊ばさう、と言ふのぢやものなう。

話相手にもしなかつた若い者たちに、時々うっかりと、こんな事を、言ふ様になつた。

かう糸が無駄になつては。

今ウの間にどし／＼續んで置かいでは――。

乳母チオモの語に、若人たちは又、広々として野や田の面におり立つことを思つて、心がさわだつた。

さうして、女たちの刈りとつた蓮積み車が、廬に戻つて来ると、何よりも先に、田居への降り道に見た、当麻の邑ムラの騒ぎウハサの噂ウハサである。

郎女様のお従兄イトコ恵美ミタチの若子ワクゴさまのお母様ハラも、当麻真人のお出デぢやげな——。

恵美の御館ミタチの叔父君の世界、見るやうな世になつた。

兄御ケイミを、帥スウの殿テンに落しておいて、御自身はのり越して、内相ナイシの、大師タイシの、とおなりのぼりの御心持ミココロちは、どうあらうなう——。

あて人に仕へて居ても、女はうっかりすると、人の評判に時を移した。

やめい やめい。お耳ざはりぞ。

しまひには、乳母が叱りに出た。だが、身狭刀自自身ムサノトジのうちにも、もだ／＼と咽喉ノドにつまつた物のある感じが、残らずには居なかつた。さうして、そんなことにかまけることなく、何の訣やら知れぬが、一心に糸を績ウみ、機を織ウつて居る育ての姫が、いとほしくてたまらぬのであつた。

昼の中多く出た虻アブは、潜ヒッんでしまつたが、蚊は仲秋になると、益々あばれ出して来る。日中の興奮で、皆は正体もなく寝た。身狭までが、姫の起き明す灯の明りを避けて、隅の物陰に、深い軒を立てはじめた。

郎女は、断キれては織り、織つては断れ、手がだるくなつても、ま

だ梭ヒを放さうともせぬ。

だが、此頃の姫の心は、満ち足らうて居た。あれほど、夜々ヨルヨル見
て居たオモカゲビト倂ヒト人の姿も見ずに、安らかな気持ちが続いてゐるので
ある。

「此機を織りあげて、はやうあの素肌のお身を、掩オホうてあげたい
。」

其ばかり考へて居る。世の中になし遂げられぬものゝあると言ふ
ことを、あて人は知らぬのであつた。

ちよう ちよう はた はた

はた はた ちよう……。

箴フサを流れるやうに、手もとにくり寄せられる糸が、動かなくなつ

た。引いても扱コいても通らぬ。箎の齒が幾枚も毀コボれて、糸筋の上にかゝつて居るのが見える。

郎女は、溜め息をついた。乳母に問うても、知るまい。女たちを起して聞いた所で、滑らかに動かすことはえすまい。

どうしたら、よいのだらう。

姫ははじめて、顔へ偏カタヨつてかゝつて来る髪の毛のうるさくを感じた。箎の櫛目を覗ノゾいて見た。梭もはたいて見た。

あゝ、何時になつたら、したてた衣コロモを、お肌へふくよかにお貸し申すことが出来よう。

もう外の叢で鳴き出した、蟋蟀コホロギの声を、瞬間思ひ浮べて居た。

どれ、およこし遊ばされ。かう直せば、動かぬこともおぎる

まい——。

どうやら聞いた気のする声が、機の外にした。

あて人の姫は、何処から来た人とも疑はなかつた。唯、さうした好意ある人を、予想して居た時なので、

見てたもれ。

機をおりた。

女は尼であつた。髪を切つて尼そぎにした女は、其も二三度は見かけたことはあつたが、剃テイハツ髪した尼には会うたことのない姫であつた。

はた はた ちよう ちよう。

元の通りの音が、整つて出て来た。

蓮の糸は、かう言ふ風では、織れるものではおざりませぬ。

もつと寄つて御覧じ——。これかう——おわかりかえ。

当麻語部姥の声である。だが、そんなことは、郎女の心には、問題でもなかつた。

おわかりなさるかえ。これかう——。

姫の心は、こだまの如く聴サトくなつて居た。此才伎テワザの経緯ユキタテは、すぐ呑み込まれた。

織つてごらうじませ。

姫が、高機に代つて入ると、尼は機陰に身を倚ヨせて立つ。

はた はた ゆら ゆら。

音までが、変つて澄み上つた。

女鳥メトリの わがおほきみの織オリす機。誰タが為タねろかも——、御存
 じ及びでおざりませうなう。昔、かう、機ハタドノ殿の牕マドからのぞ
 きこうで、問はれたお方様がおざりましたつけ。——その時、
 その貴い女ニヨシヤウ性セウがの、
 たか行くや 隼ハヤブサワケ別の御被服料ミオスヒガネ——さうお答へなされたとなう。

この中ヂユウ申し上げた滋賀津彦シガツヒコは、やはり隼別でもおざりました。
アメワカヒコ天若日子でもおざりました。天テンの日ヒに矢を射かける——。併
 し、極キハみなく美しいお人でおざりましたがよ。
 截キりはたり、ちようちよう。それ——、早く織らねば、やが
 て、岩牀の凍る冷い冬がまゐりますよ——。

郎女は、ふつと覺めた。あぐね果てゝ、機の上にとろくとした間の夢だったのである。だが、梭をとり直して見ると、

はた はた ゆら ゆら ゆら ゆら はたゝ。

美しい織物が、箴の目から迸る。

はた はた ゆら ゆら。

思ひつめてまどろんでゐる中に、郎女の智慧が、一つの閼を越えたのである。

十九

望モチの夜の月が冴サえて居た。若人たちは、今日、郎女の織りあげた
 一ヒトムラ反の上帛ハタを、夜の更けるのも忘れて、見ミ讚ハヤして居た。

この月の光りを受けた美しさ。

カトリ

縑カトリのやうで、韓カラオリ織カトリのやうで、——やつぱり、此より外には

ない、清らかな上帛ハタぢや。

乳母も、遠くなつた眼をすがめながら、譬タトへやうのない美しさと、
 づゝしりとした手あたりを、若い者のやうに楽しんで、撫でま
 はして居た。

二度目の機は、初めの日数の半ナカラであがつた。三反ミムラの上帛ハタを織りあ
 げて、姫の心には、新しい不安が頭をあげて来た。五反イツムラ目を織
 りきると、機に上ることをやめた。さうして、日も夜も、針を動

した。

長月の空は、三日の月のほのめき出したのさへ、寒く眺められる。この夜寒に、佛人の肩の白さを思ふだけでも、堪へられなかつた。裁ち縫ふわざは、あて人の子のする事ではなかつた。唯、他人の手に触れさせたくない。かう思ふ心から、解いては縫ひ、縫うてはほどきした。現し世の幾人にも当る大きなお身に合ふ衣を、縫ふすべを知らなかつた。せつかく織り上げた上帛を、裁つたり截つたり、段々布は狭くなつて行く。

女たちも、唯姫の手わざを見て居るほかはなかつた。何を縫ふものとも考へ当らぬ囁きに、日を暮すばかりである。

其上、日に増し、外は冷えて来る。人々は一日も早く、奈良の御

館に帰ることを願ふばかりになつた。郎女は、暖かい昼、薄暗い
 廬の中で、うつとりとしてゐた。その時、カタリ語部の尼が歩み寄つて
 来るのを、又まぎ／＼と見たのである。

何を思案遊ばす。カベシロ壁代の様に縦横に裁ちついで、其まゝ身
 に纏マトふやうになさる外はおざらぬ。それ、こゝに紐ヒモをつけて、
 肩の上でくゝりあはせれば、昼は衣になりませう。紐を解き
 敷いて、折り返し被カフれば、やがて夜の衾フスマにもなります。天
 竺チンの行ギヤウニン人たちの著る僧伽梨ソウギヤリと言ふのが、其でおざりま
 する。早くお縫ひあそばされ。

だが、気がつくくと、やはり昼の夢を見て居たのだ。裁ちきつた布
 を綴り合せて縫ひ初めると、二日もたゝぬ間に、大きな一面の綴

りの上帛ハタが出来あがつた。

郎女様は、月ごろかゝつて、唯の壁代をお織りなされた。

あつたら 惜しやの。

はりが抜けたやうに、若ワカウド人たちが声を落して言うて居る時、姫は悲しみながら、次の営みを考へて居た。

「これでは、あまり寒々としてゐる。モガリ殯の庭の棺ヒツギにかけるひしきもの―喪氈―、とやら言ふものと、見た目にかはりはあ
るまい。」

もう、世の人の心は賢しくなり過ぎて居た。独り語りの物語りな
 どに、信シンをうちこんで聴く者のある筈はなかつた。聞く人のない
 森の中などで、よく、つぶくと物言ふ者がある、と申うて近づ
 くと、其が、語部の家の者だつたなど言ふ話が、どの村でも、笑
 ひ咄バナシのやうに言はれるやうな世の中になつて居た。当麻語部の嫗タギマノカタリベ
 なども、都の上ジャウラフ 藤フジの、もの疑ひせぬ清い心に、知る限りの事
 を語りかけようとした。だが、忽タチマチ違つた氏の語部なるが故に、追
 ひ退ノけられたのであつた。

さう言ふ聴きてを見あてた刹那に、持つた執心の深さ。その後、
 自身の家の中でも、又廬イホリダウ堂ドウに近い木立ちの陰でも、或は其処ソコ

を見おろす山の上からでも、郎女に向つてする、ひとり語りは続けられて居た。

今年八月、当麻の氏人に縁深いお方が、めでたく世にお上りなされたあの時こそ、フタタネ再己が世が来た、とほくそ笑みをした——が、

氏の神祭りにも、語部を請じて、シヤウ神語りを語らさうともせられなかつた。ひきついであつた、勅使の参向の節にも、呼び出されて、当麻氏の古物語りを奏上せい、と仰せられるか、と思つて居た予アマ期ラマシも、空頼みになつた。

此はもう、自身や、自身の祖たちオヤが、長く覚え伝へ、語りついで来た間、かうした事に行き逢はうとは、考へもつかなかつた時代トキヨが来たのだ、と思つた瞬間、何もかも、見知らぬ世界に追放ヤラはれ

てゐる気がして、唯驚くばかりであつた。娛タノしみを失ひきつた語カ部タリベの古婆は、もう飯を喰べても、味は失うてしまつた。水を飲んで、口をつけて、独り語りが嚙ウハゴト語のやうに出るばかりになつた。

秋深くなるにつれて、衰への、目立つて来た姥は、知る限りの物語りを、喋りつゞけて死なう、と言ふ腹をきめた。さうして、郎女の耳に近い処をとモト覓めて、さまよひ歩くやうになつた。

郎女は、奈良の家に送られたことのある、大唐の彩色エノグの数々を思ひ出した。其を思ひついたのは、夜であつた。今から、横佩墻内へ馳けつけて、彩色エノグを持つて還れ、と命ぜられたのは、女の中に、

唯一人残つて居た長老^{オトナ}である。つひしか、こんな言ひつけをしたことのない郎女の、性急な命令に驚いて、女たちは復^{マタ}、何か事の起るのではないか、とおどくして居た。だが、身狭^{ムサノチオモ}乳母の計ひで、長老^{オトナ}は洩々、夜道を、奈良へ向つて急いだ。あくる日、絵具^{エノグ}の届けられた時、姫の声ははなやいで、興奮^{ハヤ}りかに響いた。

女たちの噂した所の、袈裟^{ケサ}で謂へば、五十条の^{ダイエ}大衣とも言ふべき、藕糸^{グウシ}の上帛の上に、郎女の目はぢつとすわつて居た。やがて筆は、愉^{タノ}しげにとり上げられた。線描^{スミガ}きなしに、うちつけに絵具^{エノグ}を塗り進めた。美しい^{タミエ}彩画は、七色八色の虹のやうに、郎女の目の前に、輝き増して行く。

姫は、緑青を盛つて、層々うち重る^{カサナ}楼閣^{ガラシ}伽藍^{ガラン}の屋根を表した。数
 多い柱や、廊の立ち続く姿が、目^{メカガヤ}赫くばかり、朱で彩^タみあげら
 れた。むらくくと^{タナビ}靨くものは、紺^{コンジヤウ}青の雲である。紫雲は一筋
 長くたなびいて、中央根本堂とも見える屋の上から、画^カきおろさ
 れた。雲の上には金^{コンデイ}泥の光り輝く靄^{モヤ}が、漂ひはじめた。姫の命
 を^{シホ}搾るまでの念力が、筆のまゝに動いて居る。やがて金^{コンジキ}色の雲^ウ
^{ンキ}気は、次第に凝^コり成^ナして、照り充ちた色^{シキシン}身——^{ウツ}現し世の人とも
 見えぬ尊い姿が顕れた。

郎女は唯^{サキ}、先^{サキ}の日見た、万法蔵院^{ユフベ}の夕の幻を、筆に追うて居るば
 かりである。堂・塔・伽藍すべては、当麻のみ寺のありの姿であ
 った。だが、彩^{タミエ}画の上に湧き上つた宮^{クウデン}殿楼閣は、兜^{トソツ}率^{テングウ}天宮の

たゞずまひさながらであつた。しかも、其四十九重シジフクチユウの宝宮の内ナ院イキンに現れた尊者の相好サウガウは、あの夕、近々と目に見たオモカゲ倂ヒびとの姿を、心にト覚めて描き顯したばかりであつた。

刀自・若人たちは、一刻々々、時の移るのも知らず、身ゆるぎもせず、姫の前に開かれて来る光りの霞に、唯見呆ホホけて居るばかりであつた。

郎女イラツメが、筆をおいて、にこやかな笑エマひを、円マロく跪坐ツイキする此人々の背におとしながら、のどかに併シカし、音もなく、山田の廬堂を立ち去つた刹那、心づく者は一人もなかつたのである。まして、戸口に消える際キハに、ふりかへつた姫の輝くやうな頬のうへに、細く伝ふものゝあつたのを知る者の、ある訣ワケはなかつた。

姫の俯びとに貸す為の衣に描いた絵様は、そのまゝ曼陀羅の相を
具へて居たにしても、姫はその中に、唯一人の色身の幻を描い
たに過ぎなかつた。併し、残された刀自・若人たちの、うち瞻る
画面には、見るく、数千地涌の菩薩の姿が、浮き出て来た。其
は、幾人の人々が、同時に見た、白日夢のたぐひかも知れぬ。

青空文庫情報

底本：「死者の書」中公文庫、中央公論社

1974（昭和49）年5月10日初版

1989（平成元）年8月5日21版

底本の親本：「折口信夫全集 第廿四卷」中央公論社

1955（昭和30）年6月刊

初出：「日本評論 第十四卷第一号～三号」

1939（昭和14）年1月～3月

入力：菅野朋子

校正：成宮佐知子

2012年7月17日作成

2016年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死者の書

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>